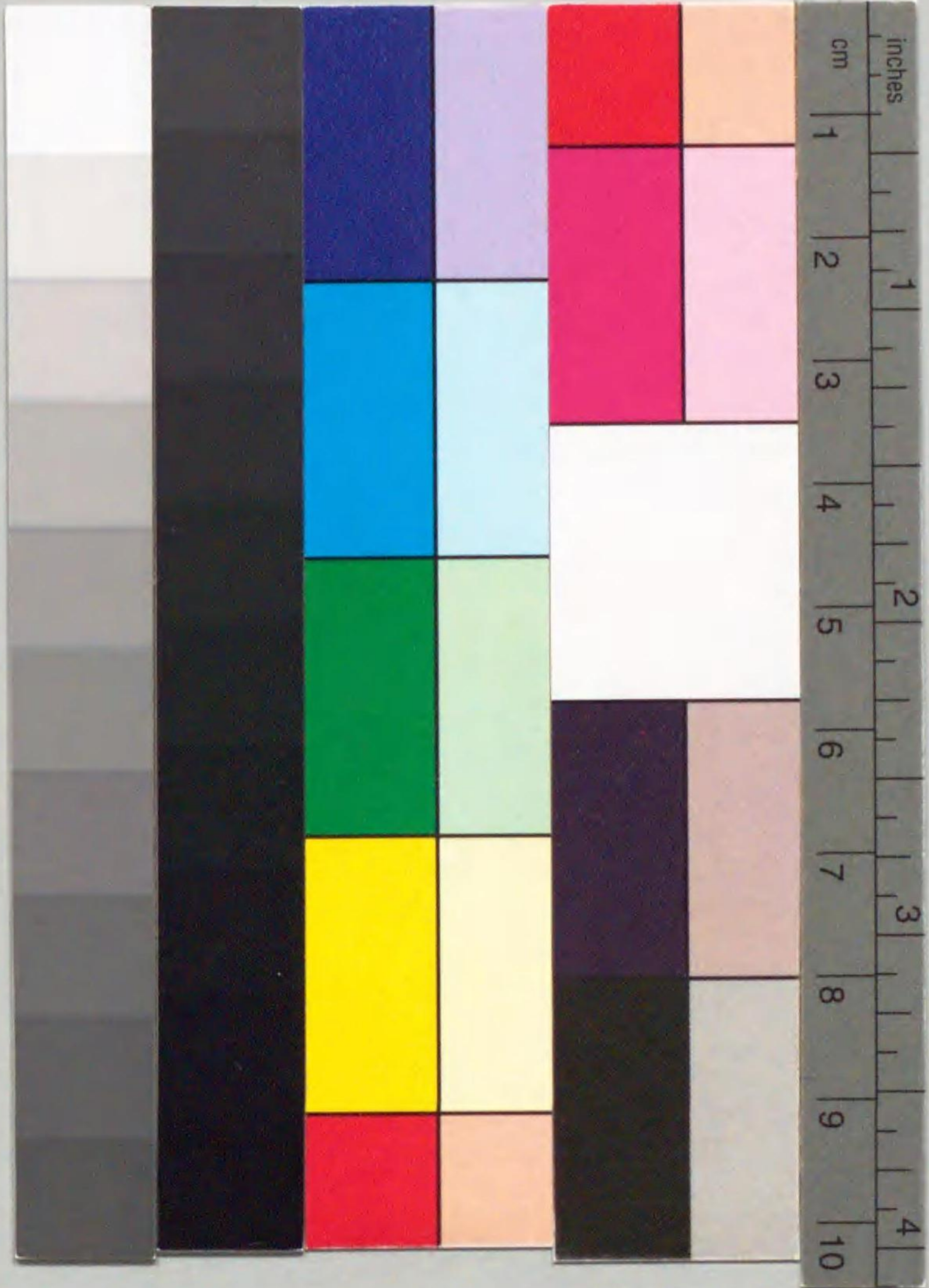


芭蕉祿記  
全

Y994-J894  
\*1200700642909\*





SANSEIDO  
KANDA TOKYO

大和の... 記... 有... 和歌... 抄...  
... 山... 記...  
... 見...  
... 杖...  
... 田... 六... 八...  
... 山... 記...  
... 見...  
... 杖...  
... 田... 六... 八...  
... 山... 記...  
... 見...  
... 杖...  
... 田... 六... 八...

Y994-J894

種 I  
W  
  
\*1200700642909\*



00  
yo

序



## 序

俳聖芭蕉の傳記評論は古人その數尠しとせず。されど廬山の嶺をなし峯をなし、遠近高低同じからざる如く、偉人の面目は觀る人によりて異なり、古人は古人の觀方あり、今人は今人の觀方あり。群盲が象の足に觸れて桶の如しといひ、鼻を握りて杖に似たりといひ、腹を撫でて壁に似たりといふは、象の全態にあらざるも皆一局一面の眞たるを失はず。吾人は傳記評論の愈々出でて愈々多く、次第にその觀察を増補擴張して、腹足より耳目肺肝に及び、渾然たる一箇の大象を彷彿せしめむことを望む者なり。犀星君は詩人にして

又小説家たり猩々を知り、好漢好漢を知る。その芭蕉禊記は詩人の心境を解せざる學者の考證とは自ら其撰を殊にし、興趣湛々情味津々たるものあらむ。

昭和二年十一月時雨ふる夜

藤井紫影



自  
序



## 自序

芭蕉樵記の中で予の觸れようと志したことは、彼の全豹的研究や傳記や考證の類ではなく、寧彼の氣魂がどういふふうに分りに打込んで來たかといふことを瞭かにしたい爲である。同時に一賣文の徒が彼の中に曾て見落され失はれてゐたものを、どの程度までに拾ひ上げたかといふことに些か後世をたのみたいからである。天下に芭蕉的學徒の先覺は殆數へるに暇が無い位である。後進黃嘴の予の如きが努々云々するまでも無い、唯、自分も亦芭蕉城をとりかこむ氣鋭の一人として、筆劔の炎を浴びながら參與してゐることだけは事實である。藤井先生には原稿を見ていたゞいて序を忝うした。年少にして先生に句作を

見ていたゞいた自分は因縁を手頼ることに喜びと親密とを感じたのである。亦桂井未翁氏には同様原稿の試閱を乞ひ、奥の細道の歴史的考證に假瑾なからしめんことを努めた。尙下島勳氏に題簽其他を忝うした。

自分は發句道の達人者ではなく、賣文匆忙の暇にこれらの隨筆を得たものである故に、出來得る限りの謙遜をも加へ、同時に予の拾得したものの上では出來得る限り強識しなければならぬと感じてゐる。武歲野書院の主人は殆二年近く予の襍記上梓について陋居を敲かれた。予の武歲野書院に情熱を感じたのも、強ち偶然ではないのである。

昭和三年四月下浣

著者







芭蕉襍記

芭蕉論

新人芭蕉

路通と芭蕉

小説道の芭蕉

嗤笑

芭蕉庵

起三頁

起一四頁

起二九頁

起四四頁

起四八頁

元祿の大家

永い年月

挨拶

發句道

天の貢物

次郎兵衛について

女

句作

起五五頁

起五五頁

起五七頁

起五八頁

起五九頁

起六〇頁

起六二頁



花屋日記を評す	起七三頁
大凡兆に就て	起八〇頁
季節の約定	起八一頁
風流	起八二頁
路通の俳號について	起八八頁
大新人	起八九頁
選料	起九〇頁
短冊	起九一頁
「かびたんの句」	起九二頁
理解	起九四頁

鶯の句	起九五頁
竹植ゑる日	起九七頁
「一つ家に」の句について	起九八頁
擬芭蕉手簡	起一〇〇頁
(杉風宛)	起一〇〇頁
(北枝宛)	起一〇〇頁
(去來宛)	起一〇一頁
(萬子宛)	起一〇一頁
芭蕉の一面	



金澤行脚と生駒萬子	起一〇五頁
芭蕉と詩について	起一二六頁
蕉門の人々	
凡兆論	起一三三頁
北枝の家	起一四六頁
丈草と去來	起一六一頁
嵐雪	起一八〇頁

芭蕉句解	
元祿の春宵	起一九一頁
お子良子の梅	起二〇四頁
薦着てゐる芭蕉	起二〇九頁
嵯峨の竹	起二一四頁
芭蕉句解	起二二二頁
椎の木蔭	起二五九頁



俳道雜記

發句	起二六九頁
靜さ	起二七一頁
清閑	起二七三頁
俳道	起二七七頁
詩と發句に就て	起二八三頁
遺傳的孤獨	起二八四頁
骨格	起二八六頁

句解

再び凡兆に就て	起二九一頁
丈草の句に就て	起三〇三頁
北枝の發句	起三〇九頁

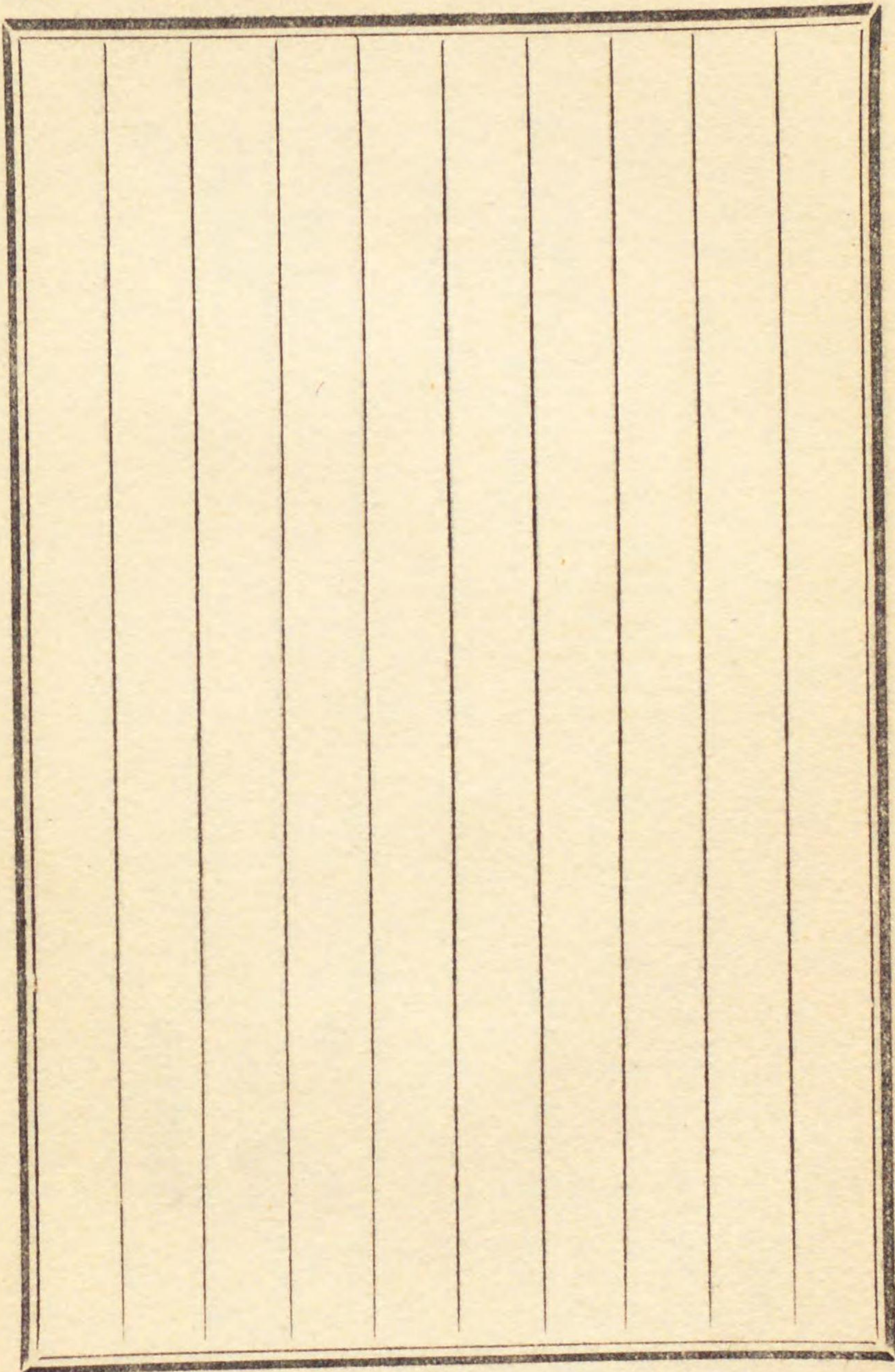
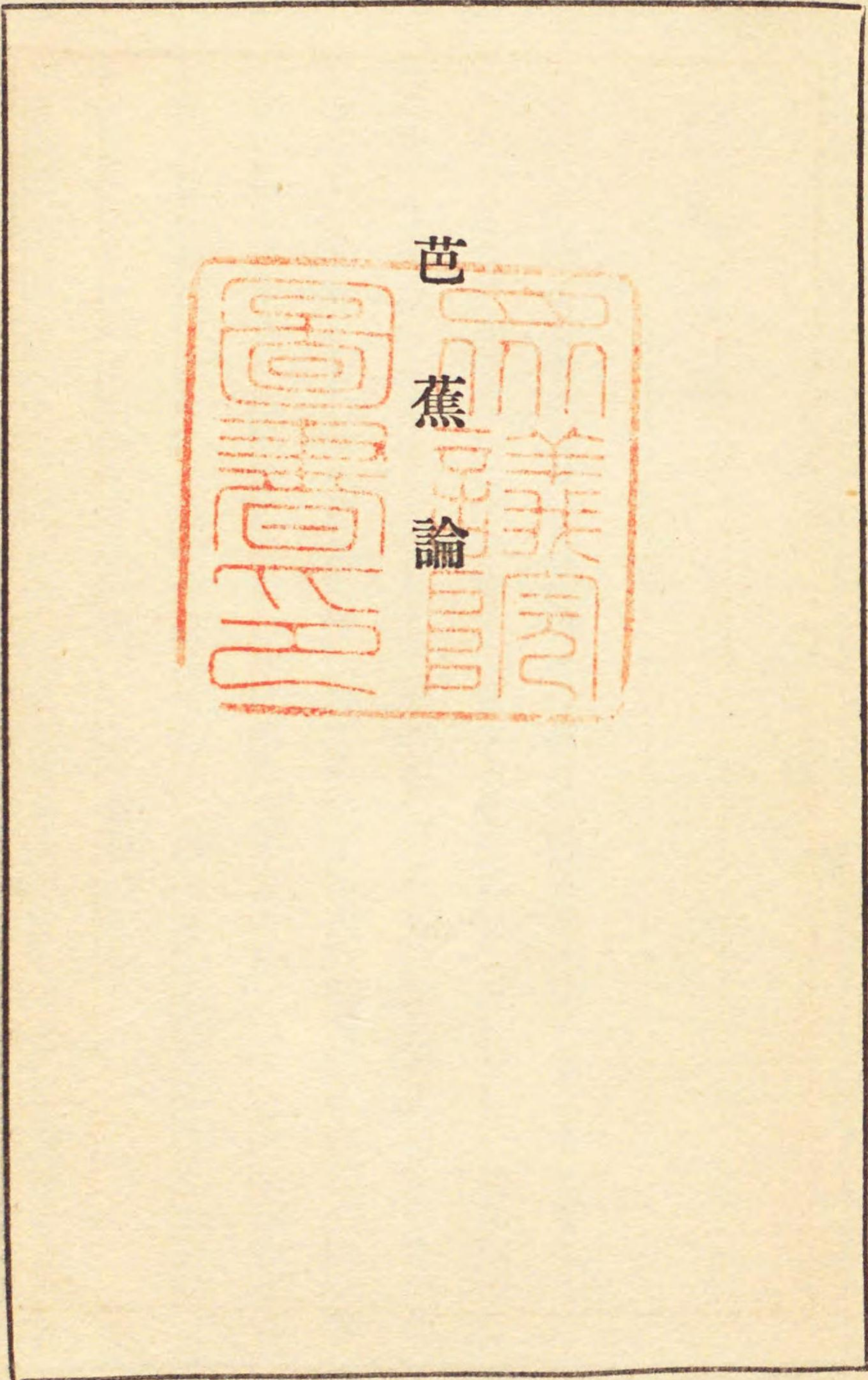
句評

一茶の發句	起三一五頁
夜半翁	起三二六頁











### 新人芭蕉

今にして念ふことは元祿時代に住んで居て、芭蕉が絶世の新しさを有つてゐたことである。その新しさは今まで二百年の彼岸に行き過ぎ乍ら、なほ泉のやうな新しさを感じさせることである。大名物や大作家の何人も此の新しさの外のものではない、併し乍ら芭蕉の新しさはそのまゝ古く膠着しない柔らかい新しさである。大雅や鳥羽僧正の新しさは年を経るごとに、ひと皮あて剥れてゆく壯大な無盡藏の餘韻ある底力を有つてゐる、彼もまた星霜と板下の加はるごとに、水からあがる鴨のやうに幽寂でしかも新鮮である。

新羅焼や高麗が掘り出されても、いま窯から上つたものとしか思はれない新



しさを持つてゐる。それにも拘はらず五百年の歲月はその古陶の精髓に丁々と滾れてゐる。此の二つの面、古くて新しい故になほ何百年かを豫約する光輝は、絶代の作家でなければ、稀代の大名物たる所以であらう。芭蕉が讀み捨てられて最早顧られない時代があつたら、その時は人類が此の土地の上に棲息しない時であるかも知れぬ。人々が此の土地にゐなくなつても或は芭蕉だけが、彼の俳句だけが、禿山の上に残つてゐるかも知れぬ。

元祿が古來稀なる西鶴の情痴を生んだことは、元祿年間の習俗の一面であることは多く人々の知るところである。そして芭蕉がその全然反對の、まだ何人も手をつけない掘出しものに寧日無かつたことも誰人も識るところである。しかし何人も氣のつかなかつたことは一介の乞食俳人たる彼がひそかに後世を信じながら、豁然とした何百年か何千年かを通じた境に住み込んで、ひとり寂し

く眼を開いてゐたことである。「俳諧の姿いまより七度も變らん。」と言つた彼は、「我が俳諧の道は後の世も廢ること無からん。」と信じてゐたことは當然のことである。師を信じることの厚い文章去來の徒であつても、芭蕉が何百年も後に生けるが如く論はれるとは考へ及ばなかつたことであらう。もう一と扶り約めて言へば或は芭蕉自身ですら恐らく何百年かの後世を、その壯大な光榮には苦笑を禁じ得ないであらう。彼もあらゆる名人の如く煩さげに世評の存外甘いことを輕蔑したであらうと思つてゐる。

芭蕉は時代に先立つとか新しがるとかといふことは無かつたらしい。彼はその氣質のまゝに時代と平衡した。その證據として彼が名人であるところの奇行逸話の類が奈何なる書物にも著されてゐない。彼の遺業の傍のものとして殘されてゐるものは、可成な嚴肅な語彙と訓話の類ひ許りである。或は敬虔の情を



述べたもので無ければ、溢美の嘆賞である。芭蕉と雖も失敗の逸話くらゐありさうなものである。文章の端肅、去來の老實、正秀嵐雪の温雅は稀代の名人を傳へるに瑕瑾無からしめたものである。惟然や路通の飄逸をしても猶芭蕉を謬り傳へたことは無い。比較的高邁の器である其角でさへも、事、芭蕉の行狀に及ぶと自ら言葉を謹んでゐたではないか。

太平の代、元祿は西鶴芭蕉の二人の興味ある二面を扶り出したが、芭蕉は西鶴を評して淺ましく下れる姿なりと曰つてゐる。「或は人情をいふとしては今日のさかしくまゝまで探りもとめ、淺ましく下れる姿なり」と言ひ、己が門に掟して「事は鄙俗の上におよぶともなつかしく云ひとるべし」と云つてゐる。芭蕉が西鶴を下れる姿だと言つたのは、彼の小説文章の意味もあらうが、主として西鶴の連俳の卑俗に當つたものであらう。最も新しい人情の科學者である西

鶴と、自然の大醫である芭蕉とが相容れなかつたのも興味がある。併し乍ら西鶴を容れない芭蕉は文章の旨い人ではない。あれほどの神韻漂渺の俳諧の奥をまで探り當てた芭蕉も、文章紀行の類は綾を尊み飾ることに吸々としてゐて、西鶴の敵ではない。幻住庵の記や、奥の細道、嵯峨日記その他の紀行を見ても、一代の俳聖であつた芭蕉の文章として見ても大したものではない。皮肉の辛辣と洞察の達者な西鶴にくらべたら、今更の如く此の二人の道の喰ひ違つたことが首肯される。靜寂を慕ふ魂と、俗情にも組する魂とは、やはり根本から入れない元祿の二つの相異つた鏡であつたらう。一つは蕭索たる冬枯の風物の中に咲く薺のやうに幽遠哀寂で、一つは混沌の感情の中に光る一個の露はな人情の獵人である。

併し芭蕉と雖も全然西鶴を容れないことはなかつた。人情の奥底を知つてゐ



た芭蕉の上に、なほ大西鶴があつたことは認めてゐたやうである。唯西鶴が嫌ひであつただけかも知れない。一日百吟を以つて誇る西鶴は、一句を練るに或は十日をも二年をも算へる芭蕉の粒々苦心の魂には近づけないのは當然である。「俳諧は時代を考ふべし」と言つた彼は、元祿の精髓の裏づけをあんなにまて叮嚀に仕上げたことは、今にして思へば芭蕉西鶴の二面相打つたゝめであらう。

衣匠や器具や陶器の類にも新しい工風と運動と改革の起つた此の時代に、彼の新しさははずば抜けてゐたことは、何よりも芭蕉が爲人たる上に興味のあることである。

明ぼのやしら魚白きこと一寸

(甲子吟行)

山路来て何やらゆかしすみれ草

(同じく)

梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉	(句選拾遺)
よく見れば薺花さく垣れかな	(續虚栗)
枯芝ややくかげるふの一二寸	(笈の小文)
春雨や蓬をのばす草の道	(草の道)
閑さや岩にしみ入蟬の聲	(奥の細道)
てふの羽の幾度越る塀のやれ	(句選拾遺)
新藁の出そめて早き時雨かな	(芭蕉翁全傳)

これらの静さの中に充ちてゐるものは、生れた時からして好ましい古さを漂はした無二の新鮮さと優柔なその心とである。木の芽を指さきで撈り摘むやうな小氣味よい觸れ方で、静かに凡ゆる風景や草木のシンを撈り摘んでゐる彼の手が、二三百年ももつと先の分を摘み取つてゐることは、實に先の見通しが利



いてゐて驚嘆に値する。この奥の方へ誰も進めぬ様に、進んで行つても何も摘み取れぬまでに、鋭い洞察を美事に刺し貫いて摘み採つてゐる。彼の歩いたあとに實際何もないうるな空漠に等しい景色でさへある。併し彼だけが歩いて行けばまた何物をも得られる道のやうでもある。

永遠とはつひに何物を指差した言葉であらう。「閑さや岩にしみ入蟬の聲」の閑寂の境には定家も西行もまだ行き着いてゐない、此の風流は日本の古い詩歌道の極北であり、もうその外へは行けなくなつてゐる閑寂の地平線である。予らが此の境で僅かに嘆賞の呼吸をつくだけである。斯の様な奥と底に行き到くまで、人はどれだけ様々の心境の數奇鍛練を経なければならぬか？——「山路來て何やらゆかしすみれ草」の可憐、その可憐に心をとめるものは、人生の垣根にさく仄かな薺の花にも心そゞぐ雅人でなければならぬ。かかる平凡である爲に

閑却された「よく見れば薺花さく垣根かな」の景色は、時に最大の景色をもしのご可憐を併せ持つて居る。蕪村の壯大がそれ故に私には懐しめぬものがあるのも往々素大で馴染めぬためである。最も微かなものには最大を餘してゐない。芭蕉が求めるものは何時も「枯芝ややゝかげろふの一二寸」の幽さである。得も言はれぬ暖さの廣がりが遂に眼前一二寸の景色に止つてはゐない。絶後の大風景をも併せ嘸んでゐるところの、最微にして最大のもの凡てが彼である。何たる淺春のいたいけな姿であらう。三たび此の句を讀んで邪氣なき姿に接し得ぬものがあれば、遂に藝道にあやかれぬ俗流の徒であらう。

自分はいま更らしくにほひやさびしをりを説かうとは念はないが、彼の清冽さは何を擱いても心を打つてくるものである。何とも云へぬ清朗さは神々しい初々しさを以て囁くのだ。「明ぼのやしら魚白きこと一寸」の明ぼのは元祿か



ら天明を抜けて明治へ一と走りに行き着いてゐる。その間何もかも遮ぎるものすらない、蕪村も一茶も又子規も渺たる一雲翳をすらかざせぬ。子規が芭蕉を採らず寧ろ蕪村の壯麗を選んだのは、當時の流行であつたとは云へ、子規の俳道にさびの絶無であつた所以である。病褥に多くの年月の苦難を経た子規は當然芭蕉を取るべきであつたのに、健實な蕪村の文學に心を容れたのは彼が病理的にたよるべき人生の活潑を求めてゐた所以であらう。彼の發句が活達なる自然を健康なる草木にのみに腐心したことや、嶄新を求めて蕪村を見出したことなど考へて見ても、遂に古い新しさに辿り着けなかつたことは、何たる彼の焦燥であつたらう。「風呂吹や小窓を壓す雪曇り」は蕪村を一步も出てゐない。怎麼にもがいても蕪村をぬけられなかつたことは、遂に彼がさびる機會が無かつたからである。性情の中にさびが無かつたからであらう。「枯芝ややゝかげろふ

の一二寸」にまで、彼が行き着けけないのは、蕪村がなほ芭蕉に及ばざると一般である。子規がさびしをりの心を養ひ得た人であつたら一層彼は後代を問ふべきであつた。非常な情熱家であつた彼の情熱は枯淡を外にして生活したからであるとも云へる。又彼は彼らしい枯淡にのみ辿り着いて、芭蕉の高さへまで行きつけなかつたのであらう。

新葉の出そめて早き時雨かな

芭蕉

松風の里は靄ゆるしぐれかな

嵐雪

嵐雪は蕉門の内でも特に温厚な男である。「松風の里は靄ゆるしぐれかな」の静閑さを一步踏み込んだ芭蕉の牙えは、もつと時雨の何者かを擱んでゐる。嵐雪の道具立を踰えた彼の直接的な新しい觀照は、殆ど比較にならないくらいゐる効果を出色してゐる。嵐雪のよたよたな腰の弱さに比べたら、何と云ふ把握力



の強さであらう。しかもその強さは一寸動きさうもない巖丈さで、永生動かないところのものである。

### 路通と芭蕉

路通が芭蕉を賣つたユダだとしても、彼れの眞實の心は師叟を怖れ震へた心で、絶えずその偽筆を夜半の小机の上に試みたものであらう。彼の狡猾しい心を以てしても、なほ芭蕉の心を有難いものとしたに違ひない。或は去來丈草の徒よりもつと芭蕉の何物かに觸れてゐたことは實際である。苛責と良心とに路通は絶えず師叟に謝りたい心を有つてゐた。悔ひ改めたユダの心は恐らく路通は始めから有つてゐたのであらう。しかし彼が左うしなければならなかつた

生活は、芭蕉の睨顔を以つてすれば疾くに氣が附いてゐた筈である。

師匠の偽筆を膺る事などは今の世では何でもないことである。路通の偽筆が世にそれ故に珍重されてゐるとしたら、路通と雖も一層の赧面羞恥の情に慚死せねばならぬ。蕉門の師弟は温厚でなければ典雅從順の徒の集りであつた。路通の如き異端者は一指にのみ止るくらゐである。路通を破門した芭蕉はいち早く路通の心を射透してゐた。だから路通を認めることに少なからぬ苦痛を交へてゐた程、芭蕉と路通とは近い關係を有つてゐる。

芭蕉が初めて路通に會ふたのは、行脚の折、草津守山の或る貧しい茶店の傍に憩ふてゐる一人の男に茶菓子を振舞ふたのが、師弟交誼の初まりであつた。この一見、二子の袖無しに木綿の袋を提げた乞食體の男は、路傍に睡る男としては餘りに卑しさから脱け、洒落で少しばかりの人品も窺へるところがあつた。



男は芭蕉に一首の和歌を紙片に書いて示した。

露と見る浮き世を旅のままならばいづこも草のまくらならまし

路通

芭蕉は乞はるゝまゝに、その男に路通の名を與へ、爾來風雅の交りを約した。路通が芭蕉の何人であるかと云ふ事、自分の近づいて行くべき人は芭蕉を置いて他に無いことを知つてゐたのであらう。人の軒下に眠る放盪無頼の果に、もう一度彼は人生に呼びかけて見て、どうにも爲らぬ身の振方をつけたのである。路通の詩情は同時に生活の改革でもあつた。

その後江戸（元祿二年）に出て深川の芭蕉庵の近くに借家して、日夕、師叟に親しんでゐたが、絶え間もない貧窮は杉風ですら持餘した程であつた。芭蕉庵の乏しい米櫃の厄介になつたことは勿論のことである。師叟に隠れた時折の短冊賣や、見窄らしい心になつて名もない町人相手の俳諧興行に身を窶したこ

とも再度ではなかつた。芭蕉は言葉を繼いで生業と俳道の正義を説いたのであるが、風頼犬の如き路通はその度に本心に還り乍らも、芭蕉庵を一步外へ出ると持前の放埒に身を委せ、口に師叟を楯に町人俳諧の取込役などを勤めるのであつた。彼はその度毎にこれは悪い事だと云ふ後悔をくやみ乍ら、芭蕉の耳に入ることを恐れたのであつた。親密の中に端正を含む意見振り、柔しいが時とすると人の腹の中まで見据えてゐるやうな眼付、さういふものを路通は絶えず師翁から感じ、絶えず事の發覺を恐れてゐた。その意味で路通は生涯を通して芭蕉を惧れ過ぎた位、恐れたのであつた。師翁の愛情をさへ恐怖に代えなければならなかつた路通は愛情を噛み締める間もないくらゐであつた。それほど窺かに芭蕉の聲名を售り、それを己の口に上らせることに依つて乏しい衣食にありつくのであつた。



「おれは師匠を售つてゐる。賣れば賣るほどそのためにもおれには師匠が必要だ。おれが師匠を賣るごとに謝りたい心で一杯になつてゐる。おれはそれを止めようと思つてゐるが、おれのやくざな暮しはついそれを遣つてしまふ。」彼れは芭蕉を口にしないことは無く、それを口に上らせることに無邪氣で狡猾な心で、世の愚人に接したのであつた。芭蕉は路通を見るごとに苦痛に近い表情をした。その表情と心の有態はすぐ路通に通じた。かれも苦しうに師匠と對座しなければならなかつた。かういふ彼らの状態は一層兩方の心を却つて深くしたものでないか。

曲水あての手紙の端に芭蕉は斯う書いてゐる。「路通事は大阪にて還俗いたしたるとの事、推量いたし候、其志三年以前より見え來たる事に候へば驚くにたらず候、とても西行能因の眞似はなるまじく候へば、平生の人にて候、常の人

が常の事をなすに何の不審か可有御座候哉、拙義においては不通仕まじく候、俗になり候へてなりとも風雅のたすけになり候ばむかしの乞食よりまさり可申候。」と書いてゐる。その淡々たる手簡の内に何とない憤りさへ流れてゐるが、それだけ隠れた芭蕉の心が微かに動いてゐる。幾度とない改悛の心を披瀝した路通のすつかりを彼は見透してゐたのであつた。騙されまいとしながらなほ騙されてゐる氣持ちは、絶えず芭蕉の心の中にあつたらしい。

芭蕉は路通に問ふてあなたは何をして居らるゝとも云はなければ、何をせよとも言はなくなつた。唯、時とすると作り話などに耳を藉し乍ら、芭蕉は眠さうに半眼を見開いて、路通の言葉を聞き流すくらゐであつた。さういふ芭蕉を知つてゐる路通は氣拙く寂しく芭蕉庵を辭することもあつたが、別に芭蕉はそれを引止めようとしなかつた。軽い憎しみに加はる愛着はあり乍ら、最も人間



的な芭蕉がそこに端然と坐つてゐるだけであつた。どういふ時にも芭蕉が一番人間的な心の構えを以て接してゐたのは、路通の場合が多かつた。一個の清濁を併せ有つてゐる路通の魂は、芭蕉のさびを以てしても澄ますことが出来なかつたらしい、芭蕉は心で路通をあきらめかけ又諦めかねてゐる。通じかねる永い清濁の結ばりが根を張つてゐたのである。

吸露庵涼袋の「頭陀物語」は信用できないが、或時、路通が鬼貫の宿を訪ねたことが書いてあつた。「今鬼貫の名を隠し朝夕の煙をいとふ、昔は花洛に遊吟して翁と晝讀の遊をもなせしが……」そして鬼貫は明日の飯をも缺く貧窮の暮しであつた。路通には困窮は解りながらも、自身もなほ頭陀袋下げる身のどうなり様もなかつた。涼袋は此二人に偽筆の一夜を明させたやうに書いてゐたが、芭蕉臨終の時も鬼貫は病床に通されなかつたことを考へると、支考丈草去來な

ども此事は知つてゐるらしく思へた。花屋日記に「鬼貫來る去來應對して還す。」とある。笈日記の同じ七日には鬼貫のことが書いて無い。

芭蕉が心苦しきから路通を破門したのは、芭蕉本來の心もあつたらうが、他の子弟を慮つた氣もちも無いではなかつた。路通とそのまま交はることは目を追ふごとに苦痛になり、路通の方でも庵の戸を敲くことも時稀になるのであつた。しかしそれも三井寺の僧の取なしで許されたが、路通の心にはそれ以來何か硬い氣もちが残つた。敬愛は拗れたまま融けないで彼のつむじを拄げたのである。彼が本統の心で芭蕉を慕ふたのは矢張師翁歿後であつた。「花屋日記」に依ると、芭蕉は去來丈草支考を床近く呼んで、遺言のあとで斯う附け加へてゐる。

「路通とも親しく交はつて下され、あのやうな男であるが心には善いところが



あり誠がある、決してあの人を仲間はずれにしてくれないように頼みます。」  
 「花屋日記」は信じないとしても芭蕉といふ人は、かういふ叮嚀さのある人であることも實際であつた。必ず斯う遺言したであらうと私は信ずるのである。芭蕉生涯中の心を痛めた路通であつたゞけに、私はその言葉を信じてゐるのである。

路通はこの元祿七年十月十二日芭蕉屬曠に就いた日には、加賀金澤の町に行脚の假遇をしてゐた。生駒萬子の手厚い世話になつてゐたらしく、路通自身「むつまじき方ありて、日數へぬ。」と言つてゐる。路通は殆何物の死よりも、芭蕉を失ふたことに驚かされ嘆かされてゐた。今更のやうに謝りたい氣持と悲しみに萬子と交々傷んだのであつた。路通は何か知ら平常から師翁にその本心を解き明し、それを聞いて貰ひたかつたのである。本當の心と云ふても路通自身さ

へ釋明しがたい何物かであつた。話さう話さうと念ひ乍らたうと言ひ盡せない或る心持であつた。正邪を區分した彼自身の委曲した氣持の一切であつた。併しいまは彼はその機會を永く喪ふた。芭蕉の生前に或る不愉快を起した氣もちが、當然路通自身から起つてゐる何物かは、もう路通には手がつけようがなかつた。彼れは秋風の稍々寒い異土を彷徨し乍ら絶えずその思念に囚はれ惱まされた。しかも彼はその師翁の病褥を訪ふ機會も無く、亦最後に自ら花向けすることでもできなかつた。

富裕である萬子には路通の生活が最初から解つてゐるだけ、師翁の病歿を聽いて悶々する彼の蒼褪めた顔容の中に、何よりも著しい焦燥と苛責とを讀み分けることが出来るのであつた。しかし右するも左するも心悶えた路通を見ると、萬子自らも壓せられた程であつた。路通は萬子から旅途の費を得て上洛の



途に就いたのは、それから間もないことだつた。

路通は芭蕉翁行狀記の中でかう書いて自らを悔んでゐる。

「やつがれば此三とせ折々のたかひめに、翁心障り侍りて、音信も遠ざかり侍りぬ。されどむかしの哀みふかきに社こそかへつて惡みもつよからんとおもひながして、やをら憂世にまかせうち暮しぬ。然るを定光坊實永阿闍梨心かゝり成とて、翁の方なだめまいらせ、此度萬罪ゆるし給へども外の障なと侍れば、面むさうときさまにて、それよりはやつがれ加賀の國へ旅立ける。そこにむつまじき方ありて、日數へぬ。此度翁遺言の次に、餘命たのみなしなからん後、路通が怠り努々うらみなし、かならずしたしみ給へ、その望おのゝく聞あへり。今さらくやしのみぞせんかたなき。やつがれはせめて十四日の法事に參合ぬ。新舗塚の前櫓の花筒ものあはれに、聲もふるひながら、陀羅尼など

涙おさへて……」

彼は俳諧勸進帳に自ら乞食路通と記してゐるが、しかし芭蕉を知つた後の生活は、昔、人の家の軒に眠つた彼でないことは勿論であつた。衞奇と鬱屈とを持つてゐた彼は、師翁歿後前後は貧窮ではあつたが、不思議に時折藍鼠の羽織打ちこかして、其角などゝ交り乍らゐた。觀進帳二卷は決して路通が孤獨の男でないことを證左してゐる。むしろ彼は莫逆の友を得ないで、やゝともすれば瓦石の友垣を結んだ爲めではなかつたか、何と云つても芭蕉は彼の生涯の師翁であり、益友であり別の意味の親御のやうなものであつた。

ひからかす袖や小春の死出の旅 路通

風俗文選で許六は「路通者不知何許者不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅。其性不實輕薄而長違師命、瓢泊之中著俳諧之書。」と書き、路通を不實と輕佻の者とし



てゐる。その去來との俳諧問答の中にも路通を卑しんでゐるところが尠くない。路通は輕薄であるといふことは、その乞食生活を皮肉つたものであると同様に、スネ者のひねくれた性格は人に容れられなかつた。芭蕉でさへ持餘した彼は他の門人に容れられる譯がない、——温厚な丈草法師さへも路通には眩しい眼付をしなければならなかつた。しかし師歿後は丈草に多く親しみを感じてゐたのは師臨終の折諸友もみな路通と親しくして呉れるようにとの遺言も所以したものであつたらう。路通の性格には風雅高韻の相は無かつたが、その生活振りの中には甚だ近代風の破れ毀れた性格を持ち廻つたものであつた。そのために疎まれ乍らも彼は彼らしい生活を後代にまで傳へたことは蕉門の一異彩であつた。常に飄逸である如くして然らざる悲しさうな彼の顔容の中には、拭へぬ人生の風雪があつた。人にも我にも容れられぬ人間らしい一切のものを搔き集めた放

浪の魂が彼の生涯を切り廻してゐたために、不實薄情の様に人々から睥睨されてゐた。私は彼を憎みながら彼の何物かに心惹かされてゐる。彼の性格の中に我々の持つ善良とする意識を裏返しにして見せたものを、彼は時に臆面なく展いて見せるからである。それ故自分は許六のやうに誹ることは採らぬ。

いれいれと人にいはれつ年の暮 (猿 糞)

つみすて、踏つけがたき若かな (同 )

瘦馬も淺草拜め年の市 (勸進帳)

草臥て烏行なり雪ぐもり (同 )

然し路通には一茶の僻見と露骨に歪んだ人生觀とがなく、却つて彼の人生は打沈んだものらしかつた。受身で内の方の心で呼吸してゐる。「いねいねと人言はれつ年の暮」の如く、沈んだ微笑みはその儘の彼の人生觀になつてゐた。



それに抗ふことをせず居て、或る従順と素直ささへ窺ひ見せてゐる。自分はさういふ心境に澄んでゐる路通の中に、彼の本統を見る氣がしてゐる。「草臥れて鳥行くなり雪ぐもり」の如きは、路通自らの人生が表出されてゐる。雪ぐもりが重々しく壓してゐて、そのため何も彼も動かないでゐるやうな日の光景が、さびしく一羽の鳥の立つてゆくさまに描かれてゐる。彼が北國行脚の詮方もない疲勞や心遣りの程が、その奈何様にしても見える見すばらしい風采の上にあらはれてゐる。或ひは彼の全生涯もまた「草臥れて鳥行くなり雪ぐもり」の途づれではなかつたか？ 親友の少かつた彼は一羽鳥のそのやうに陰影を負ふて歩いてゐるやうな人であつた。芭蕉さへ「路通はいづれの所なることを知らず。」と遺語集に言ひ残してゐるが、それは間違ひであらう。芭蕉は知つてゐなければならぬ筈だ。遺語集などに流布されてゐるものには、眞偽を分つて

とのできないものが往々ある。美濃の生れで享保に歿してゐるとだけ、その折々の句作も、他の元祿の諸家のやうに纏められて残つてゐない。散漫と愴惶の暮しの中で、何時の間にか書き捨てられて行つたものであつたらう。俳諧勸進帳二卷の興行も観音の靈夢によつて爲されたと序言で言つてゐるが、さういふことも何となく白々しいやうな氣がしてならぬ。

元朝や何となけれど遅ざくら

路通

鳥どもも寝入つてゐるか餘語の海

同

### 小説道の芭蕉

芭蕉もまた小説道の何物かを持つてゐる。



宗房時代から江戸深川の住居、奥羽行脚や幻住庵入鎖の生活、數へ來ると彼の生涯もまた鬱然たる小説中の人物でなければならぬ。彼自身が既にそれであるやうに、彼の發句も一句をもつて人生の數奇大局を盡したものが尠くない。彼の素直な、なげきや、句ひや、さびしがりや、感慨や、やさしい董のやうな愛情、物の見方や感じ様や、その毛深く考へ耽ることゝろなど、一つとして吾々後代の人生の委曲で無いものはない。

彼が何故小説を書かなかつたといふよりも、彼は一句の内に人生の心づくしを凝視めてゐた。小説と俳諧の間に一髮の餘裕が無かつたらしい。彼は彼の生涯のものを俳諧に込み亘らせた。餘處目をする事の無い彼は、ひた向きに俳道の王城を築き上げたと言つてよいのである。

草の戸も住替る代ぞひなの家

(奥の細道)

彼が茶人の借届に入らずしやれ者を輕蔑したことも理である。眞面目と眞實との外のもので暮せぬ彼は、その一すぢの道を徹したのは何と言つても己を知る大雅の士であらねばならなかつた所以である。彼がその生涯を通した押し方の強さは莫大のものであつた。之加も彼は騒がず急がず一句づつ押し進んで行つたのである。片々たる俳諧とは云へ、此の巨匠の踏み方は全く古今稀であつた。

草の戸も住替る代ぞひなの家は元祿二年奥羽行脚の前の三月の句である。支考の笈日記に「その後舊草を見に行けるが、たゞ見知らぬ人の住みてを待たる。むかし師叟の深川を出るとて、此草庵を俗なる人にゆづりて。」とあり、あとに「今はまことに。すまざるなりてかなし。」と當時を偲んで書いてゐる。

芭蕉は奥羽行脚の前に「股引の破れをつゝり笠の緒付かへ」て、一先づ杉風



の別業に移居した。深川の古住居を捨てたが、間もなく他の人が移り住んだことを聞いて、彼はひそかに或日その舊い門前を通りすぎたのである。折から雛かざる季節で狭い家内に、皺壇の紅いだんだらさへ格子戸を透いて見えるのであつた。寂しいやもめ住みのかれの古い住居は、いまは雛を守る娘の居る家に變り果ててゐる——「住み替る代ぞひなの家」、此處に小説家の芭蕉が、格子内の踏石に脱いだ雪駄の類まで見通さう筈がない。自分の居た間の様子も違ふ、何とも云へず昔懐しい氣もちがする、——彼の此の心もちも我々にも通じる心である。支考はその後にまた行つて阿叟がゐた家を見て來たが、いまは雨雪に洗はれて住む人もないやうに破れ毀れてゐると書いてゐる。

芭蕉が舊居を眺めに行つた心は、自分の人生を讀み残さずに置く懐しさの餘りである。温情と言はうか、素朴と云はうか、一味の子供らしい感懐を交へて

ゐて慕はしさを有つてゐる。かういふ境致にある心は多く門人の眞實を惹いてゐる。「六尺をこえんと欲するものはまさに七尺を望むべし。」の鋭い洞察を以て人生に呼びかけてゐる彼は、外科醫の手術の際、一寸の切開に一寸五分を以てする科學者の大膽とその用意を知つてゐた。彼の小説はやはり六尺を躡えんとして七尺を飛ぶ用意のあるものであつたらう。徹することに深く、さびるにいよいよ曠かつた彼は、悲しみに濁らず嘆きて澄むこと切なるものがあつた。「けふははれて笠かろく、けふはしぐれて袖もき曇、」と云ふ旅人の心を知る彼は、「一つ家に遊女もねたり萩と月」の哀切なる人生の記録を漏すことなき人生の作者であつた。「……不便のことに侍れども、吾々は行くところに止まることおほし、唯人の行くところにかかせ行くべし。神明のかならず恙なかるべしと云捨て……」て越中の磯べに遊女と別れた彼こそ、索寞たる人生にひたと面



を對せ、亦それに背後を見せて立つ自ら近代の人の持つ心を志とした人でもあつた。

芭蕉は在るまゝの人生に即してゐるばかりではない、様々な門人等の生活や門人同士の間仲勞を執り、聾である杉風のために同門へ聾の言葉を封じ、癩を病む許六にはその事を一生口にしなかつた。況や路通と同座して餓人の言葉を控えたことは勿論であつた。一介の苦勞人としての端嚴なる面目、生活者としての心意氣も坦乎として護られてゐたことは、人情の内に竊に念ひを潜め、人心の間に平和と懇切を醸すところの、心ゆたかな小説道の大器であつたからである。人として蕪村や鬼貫の苦行を止録する前に、人としての芭蕉の苦勞が足りないといふ者があれば、彼は常に人生に現れたものしか眼に止めない杜撰なる記録者の輩であらう。加賀の旅は北枝と句空との仲たがひを和睦せしめたこ

とは誰でも識るところであるが、彼が人情のこまかさ、得も言はれぬ寂しさに心に向け考へたことは、あまり人の口にしないところである。彼が小説を書いて人生に直面したら恐らく真情の内に幽韻をかなでるところの渾然たる作者に爲り得たであらう。近松の内側をあさり、西鶴の漏した機微を彼はしかも丹念に彫刻するに閑暇を偷んで綴つた人であらう。しかし幸にかれば稍々ともすれば俗流の媚に接觸しなければならぬ作者にはならなかつた。彼は靜かに一句づつ乏しい人生の灯を點け始めた。しかもその乏しい灯は山嶽の全面を壓する炬火となつたのである。

髮生て容顔青し 五月雨 (續虚栗)

奈何なる芭蕉の像を見るよりも、「髮生て」の芭蕉は既に氣魂面を打つ底の自畫像を有つてゐる。精神の生活を奥底まで辿つたものの、鏡に依らずして自ら



の容貌を描くことを擱んでゐる。す、ごみある苦行が出てゐる。端然と坐つてゐる彼が常も何物かを、喧噪な人生や騒々しい自然を手をもつて抑壓してゐる大量の態が見える。「容顔青し」の素晴らしい呼び方は、小暗い五月雨の軒端をめぐつてゐるやうである。彼が描いた自畫像の内ではこれほど凄みの出てゐる句はない。四十四歳の句であるが、彼の半生を讀むことが出来、顔色と同じい枯れ様をしてゐるその心の程も窺ひ知られる。何人が斯くまで己を書き得たか？

白髪ぬく枕の下やきりくす (江鮭子)

おとろへや齒に喰あてし海苔の砂 (今日の昔)

不性さやかき起されし春の雨 (猿蓑集)

此秋は何で年よる雲に鳥 (芭蕉翁行狀記)

あきらめも嘆きも物憂さも茫漠たる人生の行手も、自ら彼には見え透いた一

切である。一つとして彼の身邊心境の消息で無いものはない。何人も此の蒼鬱の中に杳として囁いてゐる「雲に鳥」の廻けさには驚くであらう。夜半の枕べに白髪ぬく一介の老爺の所在なさは、老いたる人の總ての所在なさのつれづれであり、斯くて此句があつてから無味の所在なさにも、老いのおごそかさかさが横はつてゐるではないか。「齒に喰あてし海苔の砂」に愕いて口へ手をあてた芭蕉は憂然として天外の聲を聞いたに違ひない。彼には日常茶飯の事々に深いおどろきと意味ある永い世の聲や姿に、いつも初々しく心を潜ませ働かしてゐる。「不性さやかき起されし春の雨」の中の芭蕉のほろりとさめた眼の中に、實に遠い世の夢まで籠つて居さうに思はれるのも誇張ではない。彼の此の幽遠の心は行亘つて皆の者になつてゐるからだ。これらの念ひが行き到けるだけ達いたものに「秋ふかさ隣は何をする人ぞ」の大極「此道や行く人なしに秋の暮」の寂寞



が、その前方に遠い雲煙のやうに聳え立つてゐる。人の言葉は限りあるものとされるが、彼の言葉には際限がなく雲表の遠さに行き到いてゐる。

日本の文學で此のあたりに行きついてゐたことには、いまさら驚くより外はない。念々止まざるもの一句をないがしろにしなかつた彼は「秋ふかき」隣を思ひ乍ら、小説道の全幅を扶り立てゝゐる。彼の自傳小説は彼ばかりのものでなく、讀む人のものにその魂を移し植ゑてゆくことは、彼が用意と廣さを持つてゐるからである。その寫實の和やかさは本物をつくり形づくられてゐる。

さまざまの事思ひ出す櫻かな (笈日記)

行秋や身に引きまとふ三布蒲團 (韻 塞)

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗 (伊達衣)

のうれんの奥物ゆかし北の梅 (菊の塵)

こちら向け我もさびしき秋の暮 (笈日記)

粽結ふかた手にはさむ額髪 (猿 糞)

前髪もまだ若草の匂ひかな (翁 草)

彼の發句の或程度までの寫實的意味を解くことはできても、その奥にどの程度まで觸れていいか分らない。實際は彼のものは俳句だか自然だか寫實だか解らないと言つた方がよい。あれ程のものは芭蕉の中に在るもので、本物の自然や草木であつたとしても、彼の場合では、彼のみの世界の現象として見た方が私の好みに合ふてゐる。彼の「さまざまの事思ひ出す櫻かな」の「櫻」は、彼の五十年の全生涯の中に散りもし咲きもした花で、普通の櫻でないのかも知れない。彼の心でのみ老いたる櫻であつたであらう。左甚五郎や吃又の作品は夜半に這ひ出して來ても、彼の作品がさういふ口碑を持たぬだけでも、心のも



のと、形のものとの相すがたの違ふ所以であらう。

園女亭に招かれた彼はその優しい一篇の物語を「のうれんの奥物ゆかし北の梅」と詠み、好箇の小品にして齎してゐる。園女亭の物閑かさ、彼が描く園女のつゝましさは常に彼の心にある女性の凡てであるにちがひない。大原女の素朴の姿を路傍に眺めて、あれこそ自分の好みのある女人だと語つた彼は、野天に育つ田舎女の美しさを悉皆知つてゐるものである。作つた上品や化粧に據る美しさを輕蔑してゐる彼は、一見、野蠻な泥の付いてゐるやうな田舎女の美を解く達眼を備へてゐる。それにくらべて園女の床しさをのうれんの奥に見た彼は、また淑かな上品をも梅花の如く感じる高尚な彼でもあつたのである。(園女は伊勢山田の醫師斯波一有の妻、夫の歿後、眼科醫を業としてゐる。貞淑端雅の婦女子であつたらう。)

「粽結ふかた手にはさむ額髪」は彼自身も物語風の作と呼んでゐる。夏の初め、笹の葉で餅をつつみながら、頬さく額と眉に下る髪の毛を搔いてゐる姿に、何か清艶のありさまが朧たげに浮ぶ。濡れてゐてもなほ白い手、笹の葉の濃いみどりの色、——坦懐の彼も自ら意識して「物語りの面影をば一句は入集すべき」と言つて猿蓑集に入れてゐる。粽結ふ女もまた彼の心の中の女である。園女の貞淑を愛する彼はまたかた手にはさむ額髪かたてにはさむの物憂さを眼に止める男であつた。芭蕉は美小童を愛したことは人々の言ふところである。元祿は殊に美小童を愛する流行の時ではあつたが、自分はむしろ彼はその美を美として愛したゞけに止つてゐるだらうと思ふてゐる。「前髪もまだ若草の匂ひかな」の彼は、美しい元祿少年の姿に眼をとめたことは當然であつたらう。併し彼を世の稚兒あさりのごとく言ふのはどうか、若い時分は(三十歳前)相當の若い者として生活を



した人であらうが、それは全幅の彼を論ふ上の問題ではない、却つて危険な中年後に蹉跌の無かつた彼は、やはり蕭條たる大雅の道に殉じた男であつた。何よりも我々の頭にそれらの色慾世界への想像を呼び起すところの（例令呼び起したにしても）何物をも其の不純さを與へないところが、彼の身上でもあり清節さでもあつた。若し情事の一端が我々の耳に入つたにしても、彼の爲人のおもしろさを加えるくらゐのもので、彼の不名譽にはならないことである。壽貞尼と彼とが何故に別居してゐたか、門人はなぜ壽貞尼の事を口にしなかつたかと云ふことも、一寸不思議である。別居して芭蕉が通ふた譯ではなからう。杉風宛の手紙には壽貞が芭蕉行脚中に亡くなつたやうに書いてある。故郷で關係があつて後にそれが無くなつたのかも知れない。唯、彼が小説道に彼自身さへ壽貞のことを書かなかつたこと、それに觸れないところを見ると、芭蕉も底を

示さない深い用心を持つて人に接してゐたやうである。

「かくれ家や目立たぬ花を軒の栗」の彼は「こちら向け我もさびしき秋の暮」の主人である。「軒の栗」の幽さに心を動かす彼の心も、到底人生に「こちら向け我もさびしき」と呼びかけなければ居られぬ或物を有つてゐる。彼の幽情寂寞の境も時にしばしば他に竊かに呼ばねばならぬものがあつた。人としての彼の弱さも剛情の中に芽ざしてゐて床しい。彼の小説道はつゞめて行けば寂しさの一すぢ道である。埃と苔とを有つ寂しさに外ならぬ。埃は人生から、苔は自然から、ひそかに彼の上に彼を古風にして見せたものであらう。



嘖  
笑

芭蕉は時に非常な高いところから門人を見てゐる時と、門人の内側の心に入つて交つてゐる時とがある。常に何か心に豊富な餘裕と寛やかな大人の笑ひをもつてゐたことは實際である。しかも子弟の間にある彼は濶達で自在な氣風を示してゐたらしい。むしろ天才ではない、一段づゝ己を築くことに營々たる勉めを努めた男である。宗房時代からの彼と五十一歳の生涯を貫いてゐるものは、一句づつの進展と、加はりゆくさびと勉強のあとである。少しの油断もしないでゐるところに、彼の素晴らしい併し地味な發展があつたのである。

人間は自分の才能を自分でどの程度までに洞察できるかどうかは疑問であ

る。しかし仕事のある人間にはその仕事によつて、自分の才能をはじめて押し拓き続けられるものである。

彼は何時もある仕事に沈潜して刻々と大成の域に近づいたのであらう。天才でない彼が結局天才の道のあるいたといふことになれば、或は天才であつたかも知れない。

病雁の夜寒に落て旅寝かな 芭蕉

あまが家は小えびにまじるいとどかな 同

「猿みの撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆云、病雁はさることなけれども、小鰈にまじるいとどは句のかけり事新らしくまことに秀逸なりと云、去來云、小鰈の句は珍しいへども、その物を案じる時は余が口にも出ん、病雁は格高くおもむきかすかにしていかにか爰に案じつかんと論じ、終に兩句とも



に乞ひて入集す。その後翁曰、病雁を小えびなどと同じごとくに論じけるやと笑ひ給ひけるとなり。」

猿蓑をあづかる凡兆も、芭蕉の「笑ひ給ひける」であしらはれてゐる。急所を突いて笑ふ彼のうづはの大きさは、この挿話の中にも悠然として坐つてゐる。彼の心に行きとゞくまでには門人等の及ばない遠さと隔たりがあつたやうである。彼自身も最早それらが日常の會話にも露骨に現れたものらしい。去來が凡兆の句評と己の句評とが、おのゝ相違してゐることについて、芭蕉は人それぞれの色分けのした句評をしたことを云ふてゐたが、それも芭蕉の細かに氣のつく一面であつたらしい。實に芭蕉はさういふ心づかひを以て接してゐたことが、門人の各々の道につかしめる朗かな原因となつたのである。凡兆には類なき洗練を、北枝秋の坊には素朴を見出し、去來を以て忠義一徹の士ならしめた

のも、彼の笑ひながら人を人たらしめたゆゑんであらう。いはんや蒼古の文章を彼のわすれがたみたらしめたことも、彼の類なき高さに近づけた徳の一つであらう。

彼が口訣に、「他門の句は彩色のごとし、我門の句は墨繪の如くすべし。折にふれては彩色なきにしもあらず……」といふてゐるのを見ても、彼が門人を教へるに隨所にその才幹を發してゐる。

じだらくに居れば涼しき夕かな 宗次

猿蓑集の撰の時、宗次一句の入集を乞うたが芭蕉は取る句がないといつて斷つた。後に宗次は「おゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍る」といつて膝をくづした。芭蕉はそのじだらくを詠んではどうかといつて、入集させたとき去來抄に出てゐる。彼が門人の間に入つて一言半句にも心を寄せ心を働かしてゐる



る一面が出てゐる。

### 芭蕉庵

寒菊の隣もありや活大根 許六

冬さし籠る北窓の煤 芭蕉

月もなき背から馬を連て来て 嵐雪

「今の六間堀の裏と、御舟藏との間に鯉魚のいけすを持ちし者あり、そこに住みたりといふ。」「類聚名物考」(樋口攻氏芭蕉研究)

芭蕉植ゑて先づ憎む萩の二葉かな 芭蕉

芭蕉庵は一ト間に勝手をついた手狭なものであつたらしい。杉風の別業を繕

ふて建てたものである。古池に枯葉の浮く初冬、水の温む暖い春さき、芭蕉は自ら炊ぎ焚いてゐた。自分がかういふ彼の生活に沁みついて、彼のことを考へると落寞の情が一しほ深い。浅い井戸端で一向年齢の分らない氣むづかしいやうで親切深さうな彼が、米をごし／＼磨いでゐることを思ふと、幽思自ら元祿の昔に飛ぶやうな氣がするのである。時折障子をあけて外を眺める彼は何ともいへず好ましい品のよい男のやうにも見える。

「この道はもう霜時で参られませんか。」彼は井戸端で道問ふ人にさう答へる。元、杉風の家はいけすのあつた池に、枯れ草が参差として折れ込んで、霜に瘠せいでめられてゐる。片戸の開いた庵の勝手口に、青菜があををあをと冴えて見える外、別に道具らしく際立つたものがない。

芭蕉破れて盟に雨をきく夜かな 芭蕉



樋口氏は「今の西元町の萬年橋と猿子橋との間で、六間堀に面した通りの能登屋といふ下宿屋の中庭に、古井のやうな形になつて遺存されてゐる。」といつてゐる。

予は芭蕉の容貌をよく想像して見るが、年よりも老けて見え、齡四十に達しない前から霜を交へてゐたこと、四十にも五十にも見えた説が當つてゐる。しかし何か枯槁されたまま敲けば音のある凜乎たるところがあつたらしい。門人の内でも氣の弱い者はその端嚴に打たれたことは實際である。にがみ走つた中に一抹の柔和がなごやかに流れてゐる顔容であつたらう。

此秋や何で年よる雲に鳥 芭蕉

この漢々の年なみに彼の風貌が出てゐる。この一句の精神は結局彼の皺であり老いであるところの、晩年のかれが唯一の自畫像であつたらう。髮生て容顔

青し五月雨の彼の生彩と立體的肖像畫は「雲に鳥」の漢々の境に辿りついて描かれてゐる。實に彼の進展はほんの少しづつで、目にとまらぬやうだが、一句を出したときには、ずつと進み深くなり曠くなつてゐる。「何で年よる」の心は吾々にも動く心である。しかも明瞭には掴めない片雲漂茫の高さであるが、かれは思ひ切つて「雲に鳥」といひ、吾々の些かの象徴の殻を叩き破つて中身を差し覗かしてゐるところは、及び難いところといつてよい。

再びいへば全く彼はほんの少しづつ動いてゐて、しかも、あとで見渡すときは、はるか前方に出てゐるのだ。静かさがもつ驚く發展だといつてよい。庵の小庭に一株の芭蕉を植ゑてあつたことも實際で「芭蕉破れて」の句で見ても分ることである。



元祿の作家



永い年月

彼は幽けさの中に美しさを見出し、美しさの中には遠方を眺めてゐる。おぼろげなもの、微かなものに永い年月を見、彼の心は年月の波とともに動いてゐる。彼は實に我々に取つて宗教のやうな、物の喜びを有つて追つてゐる。

挨 拶

自分が若し芭蕉に途中で邂逅つたとしても、自分は知らずに行過ぎるであらう。それほど彼は別に何人とも變つたところの無い人物にちがひない。



併し自分と芭蕉とが電車の中で對き合ふてゐたら、自分は芭蕉だといふことに氣が付くやうになるかも知れぬ。能く見れば變つてゐる多くのものを持つてゐる人に違ひないからだ。そして自分は心の内で平常からの尊敬の念を有つやうになるであらう、芭蕉も思ひ詰めてゐるやうな自分の眼付につひ注意せずに居られなくなり、何となく柔らかい表情を一段と優しく増すであらう、自分は挨拶のかはりに微笑つて見るやうになるかも知れぬ。微笑はときに尊敬に對する手厚い挨拶でもあるからだ。或は芭蕉もその時に微笑つて答へるかも知れぬ。何となく自分を好いてゐる男だと思ふであらうし、さういふ人には好意をもつ人であるから、他に人さへ居なければ話し合ふやうになるかも知れない。

野とか山とかの小徑で行き逢つたら私と彼とは十年の知己のやうに可懐しげに話を交はすであらう、伶俐らしい自分は謙遜して彼の發句などは褒めないで

野や山の景色を目立たぬ程度で靜に物語るであらう、彼もまた發句の話などが出ない心安さにつひ穩やかな話を話し出すだらう、彼の方から發句のことを言ひ出すかも知らない、なぜかと言へば彼は彼の心の向いた時に黙つて居られない人だからだ。何時も黙つて暮してゐる人間は口を開いて話し出すと、平常から貯めてゐることを可成大切なことまでを話し出すものだ。言葉をもたない人間はそれ自身一つの思想をもつてゐるからだ。

## 發句道

芭蕉は發句を一生の仕事として平常も何時もそればかり考へてゐたであらうか。彼の生きてゐる間の仕事は發句以外には道が無いと考へてゐたであらうか。



發句が藝術の極北で精髓だと思ふてゐたであらうか。それは彼の發句論や連句の話や、遺語集を見てゐても解り過ぎる程、發句に身を委ねてゐるのだ。それにも拘らず芭蕉は一生の仕事として何時も平常も發句のことばかり考へてゐたであらうか。

自分は彼が晩年近くなつてから此の心が正確に彼に割り込んだものと思ふてゐる。自分は決して世の識者等の言ふやうな芭蕉を説きたくない、彼は文學小説に心をひそめてゐたことは、決して見通してはならぬことだと思ふてゐる。

## 天の貢物

彼は發句道精進の傍、それらの子弟に依つて米塩を得てゐることを恥ぢてゐる

たらうか、自分はこの事だけは彼は大膽に天からの貢物を受領するやうな氣でゐたらうと思ふた。だから彼は餘り品物を貰ふても感謝の情を述べてゐない、その心の一方は大きくひらいて、天からの貢物を入れるために優しい微笑みを漏すくらゐであつたらう。さういふ芭蕉は生きてゐるのだ。どういふ藝術家の心にも生きてゐる理解である。藝術の士はそれによる收穫については何時も天の貢物を受領する氣持でゐることには時代の變化はないやうである。

## 次郎兵衛について

自分が若し芭蕉に仕へるとして見ても、次郎兵衛の如く忠實ではない、去來丈草の如く恭愼の徒でもないやうである。自分は或は路通の心を心としてゐた



かも分らぬ。今もなほ芭蕉に稿を起して市にひさいであることを思へば、路通のしたことぐらゐは許さるべきことである。

## 女

獨身で通した彼の一生に、彼がどれだけ清淨な獨身であつたかどうかは分らぬ。奥の細道の旅にしても彼は全然清潔であつたかどうかは分らぬ。唯ひそかに思ふのは彼もまた枕紙のさわめく音に目ざめて、人生の獨身を嘆くために一夜妻を求めた彼であらねばならぬといふことである。誰も知らぬ間に彼は彼の寂しい現身をまかした女の一人や二人はゐたであらう、それを思ふとき、我々は芭蕉に一脈の勇敢を感じるのである。彼もまた我々のごときだつたかと恭む

氣にさへなるのである。決して輕卑の念を毛頭感じない。我俳聖はかくあらねばならぬからである。

若し彼が一夜を何處かで明したとしたら、彼は世にも悲しい顔附をして坐つてゐたであらう、恥と悲しみ、慙みと卑しみとで彼は一杯になり、自分の發句道さへ瀆れたやうに思ふたであらう、正直な人々は皆さうであるやうに彼は人目に立たぬやうに歸つて行つたであらう、併し乍ら斯様な芭蕉の中に私は得も言はれぬ誠の俳聖を感じるのだ。一生を清い獨身で送つた彼よりも、斯様な挿話をも相擁いてゐる芭蕉の現身は、我々には懐しくも愛慕の念さへ起させて來るのである。

芭蕉と女、斯様な悲しい文字は少ない、彼を遂に木石のごとく言傳へることは、彼を益々烈しい寂しさへ追ひ遣るやうなものである。生きるに物憂く寂し



かつた彼を故なく一層孤獨に書き傳へることは、追従者の寧ろあさましい理想にすぎない。芭蕉は墓下で上目皺のある額を擡げ乍ら言ふであらう。「おれを此の上どうしようとするのだ。」

## 句作

「二宿一飯の主もあろそかにおもふべからず、さりやとて又媚諂ふことなかれ、斯の如き人は世の奴なり、此道に入るものは此道の人に交るべし。」

「夕を思ひ旦をおもふべし……しばしばすれば疎ぜらるゝの意を思ふべし……」

——行脚の掟——

芭蕉もまた一介の放浪者である。延寶元年頃から江戸に流浪し始めてから、

五十一歳の秋まで深川に四度庵室を造り、最後に石山寺に住むまで眼まぐるしく東に下り京洛に上り、此間に幾度となく故郷伊賀を往反してゐる。元祿二年の奥羽行脚の百五十餘日はその生涯の行脚の最長期のものであるが、殆その生涯に落着いてゐる暇もないくらい、小行脚に次ぐに小旅行を以て終始してゐる。彼自身「旅を思ふこと」は、「そゝろ神の物に憑きて、心を狂はせ」と言ひ、「予も何れの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず……」と記してゐる程である。西行の心を慕ひ宗祇を思ふの彼は、それより先に先天的に漂泊者の魂が根を張つてゐたらしく思はれる。旅といふものはよくよく富めるものでなければ、よくよくの貧しい者の行ふものである。彼の落着きを以てしても、胸の酸ゆくなる思ひで苦しい工面を重ねて行脚にでかけることを思へば、彼もよくよくの旅藝人らしい悲しい氣もちを持つてゐたらしく思はれる。彼は行脚



をもつて詩情に一味の幽暗を加へることは明記してゐるけれど、恐らく人情の新鮮、山河の變移などに心打たれて行くところの、やはりさびしかりの性分から旅を企てたものであらう。

彼ほどの人物が色々の土地で様々な人々に逢ふことに珍しがつてゐたこと、新しい山河の姿に喜び驚き乍ら四顧してゐたこと、なほ彼が一代の俳匠たる隠れなき大名を負ふてゐるところなど、彼が存外澁い枯淡の中に大名を爲した人間らしい姿を持つてゐたやうに思はれる。口をひらけば戯談の裡に諷刺の相を帯び、笑ひの中に人を壓するものを持つてゐたやうである。彼が奥の細道の旅を終へてから始めて人に會ふことを厭ふてゐる。五十一年の生涯に彼が人を厭ふたことは晩年の暮しだけであつた。奥羽行脚の疲れ、人と物語ることに疲れ、てゆく老年期にさすがの親切な翁も、やつと門を閉してゐる。「人生七十を稀な

りとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢の如し……」と言ひ、「人來れば無用の辯あり、出でては他の家業をさまたぐるもうし。……」と辛辣に皮肉めいて言つてゐる。人來れば無用の辯ありと言ふ彼が、朝暮の訪客に惱まされ乍らゐたことが解るではないか、此處に苦虫を噛み潰した芭蕉翁が居る。どうかしなれば身と心との静さを護ることができぬ、さういふ考へをもつ彼には、漸く放浪者の魂がしづまつて行く境に行き着いてゐるやうである。殆落着を知らない旅人としての彼も、やつと涉獵した山河水色の寂びが心に寂びつき、宿りを深うした時に達してゐる。旅は旅の最中よりも後の心を清う洗ひ滌ぐものだ。彼の漂泊もやつと鏡にうつる山河の寂しい姿のやうに、彼の心に落着いて春花秋情を重うしてゐる。彼が閉關説を書いた心は、旅に居て世俗の煩を忘れるよりも、もつと深く切なる老來の閑



寂にあこがれてゐる心を映し出してゐるものであらう。

朝がほや晝は鈍ツツおろす門の垣 芭蕉

彼ほど作句に苦しんだものはない。彼の苦吟は長きは數年に亘つてゐる。一見、玲瓏玉の如き作句は恰も澱なくすらりと詠まれたやうに見える、併し其底を覗くと苦吟のありさまが韻律の合間に或は苦しげに漂ふてゐる。材料で苦しんでゐる彼は、或るものは捨て、捨てたものを又拾ひ上げて眺めたりして、念々の苦吟は彼の中から一道の雲氣を吐いてゐる位である。結局、彼の幽遠寂情と雖も、彼の心魂からばたりと音して落ちるものに外ならぬ。彼は刀鍛冶の鈍の味を知り、弓矢の道を心得、草木山川の何物であるかを識つてゐる。「發句のすがたは青柳の小雨に垂れたる如くして……」と言ふ彼の素直さは、時にその全然反對の枯木參差の情をもつてゐることも又同様である。彼が考へながら寂

然と坐つてゐる姿を思へば、しづかさそのもの、俳諧其のもの、眞實であるかとさへ思はれる。彼の苦吟の體は斯様な静さの中に生れ、句に入る時苦しむ彼も句に形を終へたときは、廣やかにさらりと涼しい姿で表はれてゐる。

ほろほろと山吹ちるか瀧の音 芭蕉

鶯の笠おとしたる椿かな 同

一日く麥あからみて啼雲雀 同

何の木の花とはしらず句哉 同

「翁曰、發句は頭よりすらすらと云下して來るを上品とす。翁酒堂に教へて曰、發句は汝がごとく物二三取集る物にあらず、こがねを打ちのべたるごとく有べし。」と平常教へ且つ語つてゐる。彼は心で苦吟し讀み上げる時の玲瓏を期待し



てゐるのである。

彼は一句の面の上に何かしら新しい言葉を惹くことや、また作語することに巧みな事、上へ上へと登る言葉に平常も苦心してゐる。何度も置き換えて見て、又捨てることは珍らしくない。彼が作意ある言葉の美しさ新しさを見ると、彼の苦心のあとが歴々と解るのだ。

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく	芭蕉
草枕犬も時雨るゝかよるのこゑ	同
こがらしや竹にかくれてしづまりぬ	同
髪生て容顔青し五月雨	同
起あがる菊ほのか也水のあと	同
枯芝ややくかげるふの一二寸	同

行春にわか浦にて追付たり	同
四方より花吹き入れてにほの波	同
日の道や葵傾く五月雨	同
初霜や菊冷初る腰の綿	同
八九間空で雨ふる柳かな	同
風色やしどろに植る夜の萩	同

これらはその嶄新な造語であり馳句であつたに違ひない。今見ても何かの新しさが立句ふてゐる。容顔青しの凄みの寂寞、追付たりの思ひ切つて迫る調子、四方よりと切五文字から出た高びしやなまでの放膽、それを花吹き入れてと静かに受け流してゐるところ、菊冷初るの美しい透明さ、風色やの新らしい語彙、——これらが元祿の昔に彼によつて詠まれてゐることは、全く驚くより外はな



い。彼が文字に就いての深い心づかひと異常な神経とは、どういふ場合にでも落着いた効果を出してゐる。文字が彼のやさしい睨みにすくみ上り、彫られたまゝで凝乎として動かないでゐる。四方よりや、八九間や、一二寸などといふ文字は落着きの悪い文字づらであるが、彼によつて締めつけられると、押花のやうに平つたくなつて終ふのだ。彼の締め方が類外れて強くされてゐることは、句のなりや姿が整ふてゐるのを見ても解るのだ。彼のさびしをりの締手、その心も、こゝまで來ると色々な彼の役目の重さを負ふてゐるのが解るではないか。

彼はこの世を諸行無常だとは思ふてゐない。彼はこの世をさびしいものだといふ風に考へ耽つてゐても、無常だといふことに片づけてゐないのである。この世の中で彼の必要なものは「静さ」であり「しめやかさ」であり「さびしを

り」ではあつた。しかし此の世を詰らないとか無常だとかは思ふてゐない。まゝならぬが故にさびしくは觀てゐるのである。彼の壯大も嚴肅さもみな彼のさびしい中から彼の驥ぎあて搜り當てたものである。彼は自分で自分の寂寞を撈り食べてゐる何者かである。酒のむものは酒を友とし、悲しめるものは悲しみを友とする彼である。彼こそは生活に面しても逃げも隠れもせぬ男であつた。寂しさを友とするものは何ものよりも勁い、彼の勁剛さの鍛へられたのも彼のさびしをりの信條があるからだ。それ故、彼の地盤はいつもゆるぎもしないでゐる。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

(嵯峨日記)

彼の此の呼びかけてゐる氣もちの底は、しつかりと張り詰めて氷のやうに澄んでゐる。正面に心向け己のさびしさを呼び出してくるのを待つてゐるとこ



ろに、幅と深さと用意とがある。「うき我を」と言ふ彼は、己のやうに物憂い何時も何か考へてゐるやうな人間、——物の美しさばかりを見てゐられぬ人間、——を指してゐるのである。

ほれ柴や斯と見るより蝶の殻 (泊 船)

年くやさくらをこやす花の塵 (芭蕉翁全傳)

生きながら一つに氷る海風かな (木曾の旅)

彼の人生観といふものが、これらの形になつて現はれてゐる時に、さすがの彼も失敗してゐる。しかし「骨柴や」の場合は、斯と見るよりと急きこんでゐるところに、むしろ寫生的な味ひが出てゐる。併し乍らその根柢に脱けさらない人生の向きが露骨に沁み出てゐる。生きながらは何か烈しい悲哀を、此句の寫生の奥に控へてゐる。しかも表にあらはれてゐないのは、彼の用意の深いと

ころであらう。

### 花屋日記を評す

花屋日記は文曉の偽作で、文曉の作としてのみ後世を問ふべきであらう。去來支考等の合作では毛頭無い。師の病床に合作の日記を附けるほど彼らは職業的文筆の徒ではない、やうやく連坐の句作を以てする位の人々である。花屋日記が芭蕉屬曠の目安を以て、日を趁ふて記されてゐるのは何よりも後年の作であることを證左してゐる。

併し不思議なことは花屋日記の中にある或詩情ある嚴肅さだけは、何人もその當時の病臥の芭蕉とその周圍を髣髴するに足りることである。文曉の遺業と



して後代に残るものであることは歴然としてゐる。それ故、花屋日記は一卷の蟲くひ本としての値、木板書籍としての稀觀本としての値は、確に持つてゐる。印刷本よりも木版本として讀んだ方が、あの中にある初しぐれの降る日や、元祿諸家の入亂れて集るさまや、京へ上る伏見船が沁々として讀まれる。それに花屋日記は一篇の小説的な値さへある。自分は此の蟲くひ本に時ならぬ時雨も感じてゐるくらゐ興味を有つてゐる。

肥後七代の僧文曉の作としての文章、及びその一人づつの性格範圍に稍々近づいた描寫には、油斷ならない文章のよいところがあつた。しかも此一篇は樂しみ乍ら書いたあとが偲ばれてよい。一夜づくりで書かれたものでなく經机に靠れたまま、靜かに翁の臨終を念ひながら筆を運ばせたもののやうである。それに自分だけの考へではあるが、時雨といふものの佗しさをこれほどまで、し

みじみと書いた文章は古來すくないと言つてよい。翁の臨終を前にした去來丈草支考等も取りませた病床記の中に、雨の降るありさまが述べられてゐるのである。

「十日初時雨せり夜の明がたより度數しれずひとしほ惱みたまへり。……」

「十一日朝またく時雨す、おもひがけなく東武の其角きたる。……」

芭蕉屬曠の前後は、平常懇しい門葉等の手厚い看護に守られてゐたのである。

自ら野晒の果を夢見てゐた彼が子弟の間に、靜に大往生を遂げたのは、昔律儀の門人等であつたとは云へ、今の世にも稀に見る美談である。

病中のあまりすゝるや冬籠 去來

おもひよる夜伽もしたし冬籠 正秀

うづくまる藥の下の寒さかな 丈草



しかられて次の間に立寒かな 支考

この病牀十日間の師を思ふの情、師、子弟を念ふの心は、芭蕉生涯中の楽しい十日間であつた。又、これほど門葉の心を沁々と感じたことも生涯を通じて少かつたに違ひない。醫師である木節を信じて、他の方醫を招くと言ふ木節を退けて言つてゐる。「吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、もとより水宿雲棲の身の、この薬かの薬とてあさましう、あがきはつべきにもあらず、たゞねがはくば、老子（木節を指す。）が薬にて最期までの唇をぬらし候と、ふかくたのみをきて、此後は左右の人をしりぞけて、不浄を浴し香を焼て後安臥してもいはず。」（「笈日記」）と飽迄木節の醫薬に身を托してゐたところは、死に近づいても芭蕉は芭蕉たる所以のものを有つてゐた。今の世にこんな人は無からう。この子弟の情の深いことは後代に徴しても稀有のことではないか？――

落つきやから手水して神集め	木節
木がらしの空見なをすや鶴の聲	去來
足がるに竹の林やみそさゞい	惟然
初雪にやがて手引ん佐太の宮	正秀
神のるす頼み力や松のかぜ	之通
居上ていさみつきけり鷹の顔	伽番
起さるゝ聲も嬉しき湯婆かな	支考
水仙や使につれて床離れ	吞舟
峠こす鴨のさなりや諸きほひ	丈草
日にまして見ます顔也霜の菊	乙州
吹井より鶴を招かん時雨かな	普子

門葉一同の賀會祈禱の句を見ても、師の病の平癒を念々に祈つて止まぬ至誠



が現はれてゐる。芭蕉といへども斯くまでに深い心遣りには莞爾として死に就くことができたであらう。「十二日の申の刻ばかりに、死顔うるはしく睡れる：」と其角の「枯尾花」にあるやうに、まことに睡るやうに芭蕉は眼を閉ぢたのである。「日にまして見ます顔也霜の菊」の祈も容れられなかつたのである。芭蕉は病の途中で死を覺悟してゐたらしく思はれるのは、あれだけの人物であるだけに一層死に對する從容たる心が見えて來るのだ。遺言をと望まれて俳句は一句一句遺言のやうなものだと云ふあたりは、その言葉よりも左う云ふ事を言ふ彼の氣質には感心させられる。事實に於て彼の晩年の作二十句ばかりを見ると、人間の終る時らしい佛と重みとを有つてゐる。「夢は枯野」の句のあとに尙彼の句があるとは思へない。しかも「夢は枯野」で終つてゐるところに、物の終る姿があつた。「此道や行く人なしに秋の暮」にせよ、「秋近き隣は何をす

る人ぞ」の大きな陰影にせよ、それらは遂にやはり彼が最終の陰影でもあつた。しかも一文の金も持たない彼が平和な、普通人にも望めない幸福な死を疊の上を選んでことも、誰がしたといふこともない自然さで手厚い情愛の間に行はれてゐた。その手當には彼もほとほと喜んで謝してゐる。自分自身の心の温さが臆て彼自身に還つたものとしか思はれない門葉の看護は、芭蕉の死に面する心を澄んだ沼のやうに静ならしめたであらう。蕪村や一茶、西行や宗祇にしても、芭蕉の如き穩かさの中に死んだ譯ではない。何よりも静さが死の前にあることは、この世で一番托むべきものである。「先づたのむ椎の木」どころではない。彼の大往生は花や音楽よりも、人間の一番大切な人情の中に遂げられたのであつた。何人も斯る至倅の死を死んだものは無いやうである。



## 大凡兆に就いて

芭蕉は千數百吟の發句を後代に遺した。そして一茶は一萬句を越える發句を残した。蕪村も子規もその句作に於ては芭蕉を遙かに越えてゐた。併し乍ら我が凡兆は僅かに七十數句を残したのみであつた。しかも凡兆が大凡兆の城壁の上に輝いてゐる所以のものは、僅かに七十數句の發句に據つただけである。

「木のまたのあでやかなりし柳かな」の古今に絶した光彩は、實に遙かに一萬句を後世に委ねるよりも、一層大凡兆の所以を爲すところのものである。凡兆は天明の召波や明治の子規の比ではない。彼は元祿から明治へかけての芭蕉を除いた外では、大作家の巨鱗を實に千古に輝かしたものであつた。杳たる一凡

## 季節の約定

兆は遂に今日に臻つては、再び我々の接しがたい大作家であつた。

けふは終日の雨である。

幹は濡れ草は花季を終へ起き上つてゐる。季節の約定が次第に開けて行くやうである。自分がかういふ穩やかな日に芭蕉を感じずに居られない。漂茫たる二百年の雨の中に彼がなほ濡れながら漂ふてゐることを感じてゐる。彼は我々に取つては一つの清い季節の感じの中にも存在してゐるやうに思はれる。

芭蕉その人は最早單なる芭蕉ではなく、一つの漂茫を織りなすところの牙、であり靈感であつた。尠くとも彼は我々の視野に實に微妙な諸々の姿をもつて



現はれてゐる季節の約定の一端であつた。彼自身は既に靈感そのものに我々に映ずるやうになつた。

## 風流

芭蕉は風流人であつたらうか？——自分は彼が風流人であつたとは思はない。彼は自分で謂ふところの風流は厭ふてゐたに違ひない。彼の場合、風流は彼の氣質の中に在つたもので、後の人々がこの厭な文字の「風流」を冠せたものである。彼にはこの「風流」の説明は要らなかつた筈であつた。若し強ひてその風流を彼のために無理に押し立てようとするならば、風流の一寸前のもので、風流とはもつと純粹なものだつたに違ひない。芭蕉を風流の代表者とした

のはよい加減の文人が筆の序にさう風流人と書いてしまつたのである。

風流は俗物と壁一重のもので、紛れ易いがために一層潔い或物である。風流の變遷は遂に予の見るところでは、今や清濁併せたものであつて清きに過ぎず、また濁るに永うせざるものゝ謂ひである。併し乍ら芭蕉の氣質の中に此の濁りの無かつたことは實際であつた。濁れぬ氣質であつたと云ふより、濁つてはならぬやうにされてゐたと言つた方がよい。門人は彼を模範とする前に彼は彼の持前の清い氣質を一層門葉の信賴からも磨き上げたと言つてよい。彼を永く逆境に置いたとしても濁らぬ人であつたらう、併し彼をあゝまで清純の人として絶世に残したかどうかは分らない。彼らは知らず識らずの内に己を叩き上げてゐたのである。教へる者の教へられる渾然さは彼と門葉の間にこそ瞭らかに考へられるのである。



彼は米塩の資に事缺いても直ぐ心の荒むやうな人ではなかつた。彼はさういふ事すらしみじみと心に應へてゐた人である。さういふ生活の不如意のことさへ、彼の心へ何時も何物かを加へつゝあつたこと、それが彼を育てゝゐたことは疑はれない。貧乏人でよい素質を有つた人間の素直さは、何とも云へず美しいものである。八方に開いてゐる心のゆとりを見せてゐるものだ。ぬけ口を樂に持つてゐる彼らには鬱屈してもその度合が違ふのである。小金のある輩は必ず一方のぬけ口しか持つてゐない。彼の鬱屈は面眉を曇らせる鬱屈である。芭蕉はぬけ口を持ち合せてゐた人である。

「先日は立寄さま〜御馳走殊に、わらじまで貰ひ忝存候翌日俱利加羅を越、金澤に着申候、因縁も候はゞ再御目にかゝり可申候以上。」わらじはわらじ錢のことである。しかも玲瓏として快い響をもつて聞かれるではないか。しかもかう

いふ芭蕉でありながら同じ北越行脚で生駒萬子からの獻金二兩を斷つたりしてゐるところを見ると、彼は彼だけ使ふ分を持つてばあとは何時も斷つてゐたらしく思はれるのである。左ういふ心の正しさを自分で期してゐるところは、何者の清廉よりも一層清雅である。放浪人の性根にはこの一面の清徹が無かつたら、遂に漂泊者たる雅人の資格を缺いてゐる譯である。

「伊三郎殿庭にて的御座候由見物致と御申越、弓見物さらひに御座候間参り不申候以上。」

これは風流とは反對のものを斷つてゐる彼である。温和な彼が弓矢の興を覺えなかつたのは一理あるが、實際に於て武張つたものは餘り好まなかつたらしい。彼は彼の道さへ辿ればよいといふ考へを最後まで失はなかつた人である。彼の口譯掟によると、草木や鳥蟲の生命を容易にあやめてはならぬと言ひ、門



葉をいましてゐる。實にさういふ一面もあつたらしいが、「草庵鼠多く候間今夜猫おかし可被下候長助御申付なされ」云々の書簡を見ると、かれも鼠の生命はあやめてよいものと考へてゐたらしい。草木鳥蟲に心を配る彼が、なほ鼠の憎むべきことを知つてゐる。魚の生命の場合でもそれが爲方の無い場合はよいと言ふてゐる。彼もまた自分を信じすぎた時は、人間らしく大見榮を切つたことも無いでもないらしい。鳥蟲をあやめることの不可をいまして氣稟の中に、可成に思ひ上つた芭蕉が髣髴してゐるやうである。

しかも彼の性質の中に曾つて深い憎惡のあつたことを私は知らない。彼は憎みの情を超えて憐む心になつてゐるらしく思はれる。對手を憎むといふ強い心でなしに、さういふ氣もちを通り越した或もの、つまり哀憐で終始されてゐることが解る。路通の場合もさうである。彼は餘りに苦勞人であつたために何も

彼も己の中に、凝乎とおし静めた人ではなかつたか？——そのために爲人としての彼があれほどまでに大成されたのかも知れぬ。貧乏人は自分の中に世間をおし静める氣質を稀に持つてゐるものである。又、世間の問題を自分のものとして慨する輩もある。彼の場合は何事も沈めて置く優秀な本質から、憎み悲しみすら己のものとしたに違ひないと思ふてゐる。

結局風流といふものも予の如き少量の人間に取つては、世間へのかくれ蓑だとしか思へない。その中になれば静さがあり世間の騒音を拒絶できるからである。何事もそこには自分をいたはる心ばかりがある。他の何ものもが無い。自分にはさういふ隠れ蓑の中にあることを願ふてゐる。こゝから自分を引きずり出す者はない。さういふ者がゐても自分は出ないであらう。併し芭蕉はかくれ蓑を着てゐなかつたのだ。彼はその點では何の用意もない清朗の心でゐたらしい



思はれる。予の如きは自ら立ち籠るところがあるが、かれは自然に自分の行くところに行つてゐる。すこしの濁りも見せずに。——其處は自分の如きは到底至らないところだと残念乍ら思ふのだ。あれほど、すらりて行くにはその本質がどれほど善いものであつたかといふ事を感嘆させて來るのである。素直だとか、清純だとか、さういふ言葉では云へないものがあつたのだ。二百年の間にかういふ人物が再び得られなかつた程、かれは稀な現れであつた。これを思ふと何とも云へない快い氣もちになるのだ。

### 路通の俳號について

芭蕉は果して路通に俳號を與へたのであらうか、路上の一餓人に對して此の

路通といふ命名は、芭蕉の慎しみ深い性質から推して、殆眞實とは思はれないくらゐである。乞食の俳號を路通といふのは、路通自身には輕蔑されてゐると同様である。しかも永久に輕蔑されてゐるやうなものである。

これは路通自身が芭蕉に會ふ前から持つてゐた俳號であらう、路通は芭蕉に邂逅する前から歌俳諧を路上にひさいでゐた風流歌人の輩であつたらうから、その路通の俳號を持つてゐたことは事實であらう、自分は芭蕉が命名したとはどうしても思へない。

### 大 新 人

芭蕉が元祿を壓してゐた所以のものは、殆比類なきその時代の一大新人であ



つたからであらう。新人中の新人、殆何人も此の新しさには惹き付けられ驚かされたのであらう。今から想像して見ても國木田獨歩の出現や、子規の時代の新しさではなかつた。前代未聞の新しさであつたに違ひない。

## 選 料

芭蕉の生活費は句巻の選料であつた。貞徳が一兩を取つてゐたことは傳説であるとしても、芭蕉の選料は相應に収入があつたものに思へる。しかもそれは額の多少もあつたらうが、彼の生活費の大部分はこの選から出たものであることを忘れてはならぬ。

## 短 冊

芭蕉の短冊や書簡が比較的残つてゐるのも、無理強ひに書かされたためもあらうが、彼の在世時分からして相應の市價があり、歿後その市價が勃然として上騰したため、所藏家が大切に秘めてゐたからであらう。今は短冊一葉にすら數百金を抛たねばならぬ。しかも偽筆に至つては天下に枚擧の暇も無いからである。

蕉門の徒の短冊に至つては、残つてゐるものは稀である。路通の如きは殆絶對に無いかも知れぬ。以後今までに家藏されてゐたものの發表されなにかぎり、絶對に吾々の眼に入らないと言つてよい。この絶對に吾々の接することのでき



ない蕉門諸家の眞蹟を念ふことは、限りない敢果ない氣もちであり又同時に幽遠でないこともない。

「かびたん」の句

延寶年間、芭蕉三十五六歳頃の句に、「かびたんもつくばはせけり君が春」といふのがある。かびたんは當時のオランダ商館の主事のことを言つたものであるが、これほど芭蕉の句の中で俗流の句ひ烈しい句は無いやうである。つくばはせけり等と言ひ、將軍家を君が春などと言ひ、一代の寂びを慕ふた彼らしくも無い風俗の情に走り、媚び諂ふた下賤の心である彼を見ることが出来る。自分分は彼のやうな人物にもかういふ作句を考へさせた時代的な習俗に同情はない

ではないが、併し何たる不愉快な發句であらう。

當時かびたん輩が貢物を贈つて將軍に下坐したことは實際であるが、芭蕉までがその優越感を持つてゐたことは爲方がないとしても、作句の上にもその氣持を残してゐることは、後代の吾々を不愉快にするものである。彼と雖も遺憾なき人物の完成されたものではない。併し此の發句の上に現はれたものは吾々の信ずる芭蕉として受取りがたいくらゐの、最も彼の彼らしくない凡俗の彼を代表したものである。併し乍ら此發句に據つて元祿時代のかびたん趣味がいかに流行してゐたかと分るやうである。



理解

芭蕉を理解することは總ゆる元祿の文献を獵ることではない、彼の氣質に近い人間が自然に彼に惹かれてゆく心と言ふのであらう、もう一言いへば彼を理解する前に己の分を知らねばならぬ。己の分を知るものは、芭蕉の中に這入ることが出来よう、單なる彼の發句の解釋は文字通りの解釋となる前に、自分等の心の向きと彼の心の向きとの、秀が揃はねばならぬことだ。

人間ができてから芭蕉を理解せよといふのは、少くとも十笏を秤るものはそれだけの品物を持たねばならぬ謂ひでもあるのだ。秤にかけられぬものを持ち合せてゐても、それは叶はぬことではないか。

鶯の句

芭蕉の句の中には、最う一步あとへ退いたら千仞の月並の谷間へ墜ち込むやうな危い句がある。彼の高雅と幽遠との砦を守るべき句の中には、僅かな微妙なつながりを有つてゐるだけに、一步は月並の陳腐へ、一步は高雅幽遠の城廓に引つかゝつてゐる句がある。それでゐて月並へ墜ちないで立派なつながりを見せてゐる。

鶯や雀よけ行枝うつり 芭蕉

此の句の精神、動きの危なさは、心なきものをして鶯の高雅はその心に雀を避けるやうに考へ至るであらう、そして陳腐だといふかも知れぬ。しかし此場



合の鶯の枝移りしてゆくありさまには、雀とは全で違ふた素質の上からの枝移りである。微妙な鋭さ、當然別途に就くべきものの小氣味よい優越された氣持が、鮮に目前にある。併しながら斯様に高雅な句であるにかゝはず危なさを一層伴ふてゐる。

芭蕉のうまさや高さ奥深さは、實に斯様なところで何時も美事に完成されてゐるのである。名人の心はかういふ危さの上に確つかりと坐つてゐて動かないのだ。土俵ぎはで持ち應へる力である。假りに自分らが此の材料をこなすとしても、かういふ危い表現はしないで、安らかに詠んでしまふ。少しも月並の臭ひや憂ひのないものに作つてしまふだらう。併し乍らこれだけの表現のうまみを残すことができない。

この句は寫生から這入つて行つてゐるやうであるが、その動きの幽さ美しさ

は春寒のまだ芽のない楓か何かの、鋭い枝の間に動いて見える鶯である。觀念の句も多いが此の句には何等の意圖がなく、からりとしてゐて氣もちの高い張りをも句の裏に窺はせてゐるやうである。

### 竹植ゑる日

此間からあとさき三度ばかり庭に竹を植ゑさせたが、三度とも晝深く夕方に近いところに風が出て来て、竹植ゑると風が出るのが我庭の歳時季のやうに思はれた。自分は芭蕉の竹植ゑる日の文を思ひ起した。

「ばせを植てまづにくむ萩の二ば哉」の如きは、その氣持の細かさは解るのであるが、芭蕉としての心のしをりの沁み出てゐない句である。かれの失敗には



ぬけ道はあるが、「かびたん」の句のやうに、千古の悪句となることが無いでもない。

「一つ家に」の句について

奥の細道の句、「一つ家に遊女もねたり萩と月」は、小説的な哀愁のある句である。遊女が隣の間にて一と晩ぢう老いたる附添の女と物語つてゐる有様に、眼冴えて眠られないでゐる芭蕉は、同じ心でゐる同行の曾良を顧みて、自分の力では女をどうも救へないことを嘆いたであらう。

女が芭蕉に身のありさまを搔き口説いたのは、行脚姿の芭蕉を僧都だと思ふたにちがひない。普通の旅行者と見てゐたら幾ら遊女になる女でも、容易には

身の上を話すものではなからう。片雲に身を委す僧と見るのは當り前のことである。彼の姿とその顔容、または物の言ひ振りの閑かさは、我々がその當時見てゐても僧の外のものではない。

芭蕉がこの女を振り切つて去つたのは、女が美人で無かつたのに原因するかも知れないが、それよりも肝心なことは、情に惹かれても身の及ばざることを知つてゐたためであらう。彼の經濟的生活には女を救ふだけのものがない、彼はよく自分を知つてゐるものであつたらう。進んで宜い加減なことを言はないで去つたのは、やはり情に惹かれてもその情に沈まない確さを持つてゐたことが分る。



擬芭蕉手簡

杉風宛

先夜失禮致候其の節の忘れ物唯今次郎兵衛に届致させ候間落手被下度、乍序夜來の春雨の爲め少々雨漏難澁致候、此前雨漏候ひしより何の加減にや久しく其事無之候ひしが、昨夜來急の事とて手の付よう無、屋根方丈八に言上願上候、乍序先般の羽織の御禮内室に言上被下度右まで以上。ばせを

北枝宛

御手簡辱く拜受、その節の御禮申上べきところ歸庵早々の疲勞にて諸方御無

音に打過御許被下度候、御地風光まだ眼前に有之、野田山の松籟、蟬の啼音も今に忘難く存じ候、殊に野田産の茸お送被下、丈草諸共珍重致候、丈草も又御地一遊の有心と申居候へ共、此儀披露下さるまじく候、

末筆乍、牧童、句空雅丈へ宣傳申可被下候、萬子よりも先日音信有之、風流祝着に存居り候。ばせを

去來宛

貴墨恭拜受、後頃より參上可致候、御内室に宜敷申傳被下度候。ばせを

萬子宛

先日一笑より水鶏笛贈越し殊の外興多く存申候、貴様御手翰に據ば河鹿笛な



るもの御地に有之候由、鳩笛と又同様の物ならんと存ぜられ申候。  
お示しの發句三誦致候、風雅のしをり静かならんもの殊の外喜入候。

芭蕉の一面



金澤行脚と生駒萬子

「奥の細道」一考

元祿二年三月の下浣に江戸を出廬した芭蕉は、奥羽行脚を終へ、越後から越中の海べりを通り、俱利迦羅を踰え、加賀金澤の大樋口へ着いたのは稍々秋風のそよぎを稻田に見られる七月の中頃であつた。同行の河合曾良と共に長途の旅寢の露に顔容いとゞ疲勞してゐたが、奥羽山川を跋涉した芭蕉は自ら何物かを、その容貌に加へられてゐた。山川を獵るものゝ絶え間なき新鮮な幽情が芭蕉の



面を眉壓してゐたことは當然であらう。

早稲の香やわけ入右は有磯海 芭蕉

越中黒部の吟詠であらうと思ふが、前書には加賀にてとある。「有磯海」「卯辰集」には越中の吟懐になつてゐる。越中から加賀に踰えるには俱利迦羅峠がある。ともあれ荒磯づたひに加賀近い平原に入つた氣持は明かである。

當時金澤には、秋の坊、牧童、北枝、萬子、小春などが主になつて芭蕉歡迎の宴を開いた。餘程數寄な凝つた料理を饗應したのもらしい。今でも金澤の料理には儂昔の傳を傳へる凝つた獻立が町家にさへ残つてゐる。森八などと云ふ菓子屋は二百年來の製菓の記録を藏してゐるやうに、料理も大藩の奢と習風を有つてゐるのである。伊賀を故郷に持ち江戸の陋居に貧しい暮しをしてゐた芭蕉は、鴨の焼物や犀麻の鮎、卯辰山の柴茸やあぶら鮎のお汁、河豚の塩漬や胡

桃の煮付などの數々の料理には、有繫の芭蕉も驚いたことであらう。北枝兄弟の熱心な調理振り、信長を先祖に有つ生駒萬子の肝煎、加ふるに宮竹小春の主振りの幹旋には、芭蕉も人の好意と自分の心のあるところが添はないまでに、暫くは物も言へないで坐つてゐたであらう。温和な人である故にすぐにはその幹旋を斷りにくかつたが、併し酒肴一巡の後に芭蕉は斯う言つてゐる。

「今宵の馳走のもてなし大名方の高膳の如く重々し。我をもてなさんには一椀の粗菜と一膳の飯にてこと足れり。何ぞ珍味を選び山海の魚菜を望まんや。後の日の會にはかかる心づかひと無益の費ひは必ず仕給ふな。」

それ故後の吟會には粗菜をあしらふた茶漬料理を出したのであつた。芭蕉はこれこそ我望むものなれと言ひ、懇しげに加賀の油揚を喜んで食べ、秋茄子の鴨焼に舌づゝみを打つたのであつた。



芭蕉は油あげや豆腐、就中、蒟蒻の類が嗜きであつた。梅石（此人物の存在は餘り信じない。）宛の書簡の中にも、「昨日は御法事相濟一段候其節之油あげ殊外好味わすれかね候、御座候はゞ少々もらひ申度候以上。」と油あげを重ねて懇望してゐる。又、「今晚でんがく被致候よしかたく御やき頼入候、出來次第御遣可被下候。」又、「とうふ汁よろしく候間今晚は頼入候出來次第遣可被下候。」その他「まんぢう七つあぶら上げ五つからし三文御こし頼入候。」庄八宛。「以上翁反故。」それ故、金澤の常場物料理は特に氣に入つたのであらう。恐らく油あげや蒟蒻の類も膳の上に並べられた様に思はれる。

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

（小文庫）

蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉

（若菜）

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

（もとの水）

句による蒟蒻には一道の風雅な味を含んでゐる。芭蕉の食物好みの中にも、何やら優しい粗食の中に風色を帯びたものが感じられる。食物の好みとその人がらの心の容子とは、結び合せて眺めると自ら釋然とするところがあるものである。

「諸禮停止は風雅の舊制也、何の謝する事やあらん、みなく近う圓座し給へ」とて、茶漬一二椀さらさらと打したため、風雅は斯くこそあらまほしけれ、すべて酒食の奢に隙を費して、俳諧の味を忘るは、遊里、戯場の物ずきにして、風雅の席には無下なり」（遺語）

芭蕉はもう四十六歳を數へてゐる。猿蓑集完成の二年前で、一見、その風格の中に迥かな睨みが、晩年近い故か、冴えて人の面を打つたらしい。温厚の中にも得も言はれぬ氣高いところがあつたと去來が絶えず口にしてゐたことも真



實であつたらしい。當時金澤俳人の眼からは或は神の如く見えたりかも知れないのである。萬子がその折に書いて貰つた「南無當來佛」の五文字軸を朝夕に拜してゐたさうであつた。「干綱集」にも芭蕉を夢見て神の様に書いてある。——殊に田舎の謙遜の心を持つ秋の坊や北枝、小春の徒が、平常から尊崇の的にしてゐた芭蕉と對坐する時に異常に敬遠してゐたことも思はれる。「みなく／＼近う圓座し給へ。」と芭蕉が改めて挨拶する程、かれらは疊を隔てて遠坐してゐたものらしかつた。師弟の間には嚴格な人であつたが、(これは故意としてゐる譯でなく、自然に彼等門人が作つた雰圍氣ではなかつたか、芭蕉自身の中にも曲つた事、正直ならぬ事、禮節を外にした事等を嫌ふた徳があつたためであらう。芭蕉庵の壁紙に句作の折に柱に靠れぬ事、人の煙草を喫まぬ事、他人と話を交へ句作の邪魔にならぬ事等が記されてゐて、出入りの人々は自然にこれを守つてゐ

たさうである。)それでゐて或る程度までの溫柔を保ち乍ら、却々その底が分らない或る一點の深さをも持ち合せた人であつたらう。丈草去來、嵐雪其角の輩をはじめ、鬼貫一徒、そして全元祿の年代を擧げて誰一人として芭蕉を誹る者があつた程の晩年に、人望と徳と畏敬の的であつたのも、その心がけの眞摯さ温かさ嚴格さに人々の心を惹きつけたものであらう、武人に之を求めても徳川の如きものではない、己が門をつくと云ふことなく、また他門をそしり侮ることもしなかつた。貞徳宗因の諍ひをも芭蕉は靜かに眺めてゐただけである。宗因なくば今日の俳諧なしとまで彼は言つてゐる。

## 二

ともあれ彼の如く子弟の間に厚く念はれ敬はれたものは、殆ど較べるものも



持たぬと言つてよい。今の世の師弟の道廢れ世態人情の澆薄さにくらべると、皓然たる鏡の如きものがあつた。昔の人の律儀さを思ふ前にあの人の徳を知りたいのである。

芭蕉は金澤俳人の中に既に小杉一笑が亡くなつたことを知り、一笑の兄と追善の一卷を残した。

塚も動け我が泣く聲は秋の風 芭蕉

一笑は芭蕉と交通があり一笑も芭蕉に會ふために楽しんだが、芭蕉がまだ行脚の一年前に一笑は亡くなつてゐたのである。

「加州金澤の一笑はことに俳諧にふけりし者也、翁行脚の程、お宿申さんとして遠く心ざしをはこびけるに、年有て重勞の床にうち臥しければ、命のきわもおもひとりたるに、父の十三回にあたりて、歌仙の俳諧を十三卷、孝養にと

て思ひ立けるを、人々とどめて、息もさだまらず、此願のみちぬべき程には、その身いかゞあらんと氣づかひけるに、死すとも悔なかるべしとて、五歌仙出來ぬれば、早筆とるもかなはず成にけるを、呼かたじけなくに成ても猶やまず、八巻となく満し足りて、これを我肌にかけてこそ、さらに思ひ残せることなしと、悦びの眉重くふさがりて、

心から雪うつくしや西の雲 一笑

臨終正念と聞えけり、翌年の秋、翁も越の白根をはるかにへて、ノべつ松が家に其餘哀をとぶらひ申されけるよし。(其角、雜談集)

一笑を旅に追善する芭蕉の深切な心は當時の加賀俳人の心に美しい餘映をあつた。その他、秋の坊と北枝の間が何時も口争ひの絶えなかつたのを、同好同門の睦びを解いて永い間の犬猿の仲を和らげたことも、遺語集に掲げられて



ゐる。

併しその時代に屢々あつたやうに、金澤俳人の中に唯一人、貞門を固守して芭蕉來錫の折にも會はなかつた男があつた。山茶花友琴といふ人で、頑固に門を閉ぢて芭蕉と交遊しなかつた。芭蕉はその事を聞いて友琴の心あるところ、人その門に隨ふことの清節を愛したさうであつた。一代の芭蕉を向ふに廻しての友琴の押しが強さもさることであるが、性格的に金澤人には左ういふ頑なところがあつた。自分は友琴のその心を嗤ふことはしないつもりである。何故と云へば當時北越の俳雅の士は皆一堂に參集つて、麻の川の畔で親しく天下の芭蕉と談を交へたからである。秋雨のそぼ降る草庵に坐り乍ら辭して俳席に列ならなかつたことを思へば、友琴もまた淋しく切ない男であつた。(友琴死後、その追悼句集「艶賀の松」の中に北枝の句が載つてゐるところを見ると、北枝も友

琴死後にその追悼の句に吝でなかつた事、芭蕉來錫の折に出席しなかつた事などの不愉快を解いたものである事、いかにも北枝らしい恬淡な氣質で交友してゐたことなどが解る。——北枝は行を同じうした曾良と、芭蕉が金澤を辭し去つた時も、越前丸岡まで同行して別れを惜んだ。金澤では芭蕉と野田山に一遊して、松籟と茸狩の半日を送つたが、北枝は蚊やつり草とはどういふ草なりやと芭蕉に尋ねた。芭蕉はあたりの雑草から黄葉の雜つた蚊やつり草を尋ねあてて、北枝に示したさうであつた。(遺語集)北枝は「翁にぞ蚊やつり草を習ひける」と即吟を残した。芭蕉の北枝を愛したことは、山中の桃妖に劣らなかつた。北枝も師叟を慕ふこと深かつた。

丸岡にて翁に別れ侍りし時扇に書き給はる

物書て扇引さくわかれかな

芭蕉



咲うて霧にきほひ出ばや 北 枝

秋涼し手ごとにむけや瓜茄子 芭 蕉

句選年考によると、西の雲集に松其庵樂會即興と有、残暑しばしとある。韵塞に訪草庵と前書がある。花の故事集に小幻庵にて「残暑暫し手毎にれうれ瓜茄子」とある。おくの細道にはある草庵にてとある、――

此の一句でも解るが、殆金澤の名物は大半食べてゐるやうである。此の瓜茄子と芭蕉との比較は金澤の光景らしく興深く思ふた。

翁を一夜ととめて

宿るまでの名残なりけり秋の蛸 小 春

あたら月夜の庇さしぎる 芭 蕉

初嵐山ある方のはげしくて 曾 良

江ぶちのりこす水のさゝ魚 北 枝

此連句を見ても、小春の庵か或は野田の東雲寺かに芭蕉が泊つたことが判る。「初嵐山ある方のはげしくて」は今の野田山のことであらう。

金澤を辭し去り野々市の里から松任の村落に入らうとした芭蕉は、途上の見送りに遅れた生駒萬子が、裸馬で松並木のある往還を馳けて來るのを見た。萬子は千石の祿を載さぬ馬廻りをしてゐたので、馬を縦横にこなすことが出來たのである。そして加賀絹一反と、金子三兩を惜餞の贈物として芭蕉に捧げたが彼はそれを受取らなかつた。一簞一瓢の楽しみを説いた芭蕉は、自分の生活に餘裕を置くことを嫌ふたらしかつた。萬子も枉げてと言はず芭蕉の心のあるところを心とした。(生駒萬子、世祿千石を襲ふ、馬廻組、芭蕉行脚の元祿二年に



は三十六才、享保三年北枝が歿した翌年六十六才で死去してゐる。萬子の年代を擧げて見ると、鬱然たる元祿の大家の死生往來が分る。

承應三年 生駒萬子生る。服部嵐雪、宮崎友禪生る。

明暦三年 森川許六生る。

萬治元年 前田利常卒去。

萬治三年 榎本其角生る。

寛文五年 渡邊支考生る。

寛文十二年 僧浪化上人生る。

延寶元年 世祿千石を襲ふ。貞言歿す。

元祿元年 小杉一笑歿す。

元祿二年七月中の五日、芭蕉來錫。

元祿七年 芭蕉卒す。

元祿十五年 千代女生る。

元祿十六年 浪化上人歿す。

寶永元年 去來歿す、丈草卒す。

寶永元年 支考、金澤に來る。

寶永二年 季吟歿す。

寶永四年 寶井其角卒す。服部嵐雪歿す。

寶永五年 支考來北。

寶永七年 惟然卒す。

正徳五年 許六歿す。

享保三年 北枝卒す。

享保四年 萬子歿す。(時に六十六歳。)



萬子はそれ故「翁は諸國に門人みちみちて其道の融通は事たりぬべし、我は方外の友と成て、あまねく俳諧を守護すべし」(一葉集)と云ひ、騷人詩客を暗にねぎらうてゐる。秋の坊、北枝に助成したること、一つは芭蕉の心に感じたからもあらうが、餘財自ら事足りたからであつた。芭蕉は金錢に恬淡であつたことは、恬淡でなければならぬ事情があり、特に金錢を得るに道も無かつたからである。

## 三

芭蕉庵の柱には一つの瓢が吊されてあつて門人等はその中へ勝手に米を入れては去つたものと云はれてゐるが、之は實際の事であつたらう。杉風や許六の心づくしもある。併し芭蕉は貧窮一錢も得ないで机上幾帖かの料紙を用意した

り、時折々の着衣の好みも衣裳の上に現はれてゐるのは、恐らく平常金錢の事を口にしない人であつたからで、心ある人は自然に喜捨したものであらう。着物は茶がつた濫い色を好み、食物は凝らぬ野菜を友としてゐたやうである。そして寝るには薄い布團が一枚、枕一つあれば事足りる人であつた。又俳諧に身と魂とを預けた芭蕉は當然貧乏を心得てゐたので、人から見る程苦しくはなかつたのであらう。却つて彼こそは一顆の冬瓜を得て夜寒の部屋で沁々と樂しみを眺め、そして明日も明後日も安閑とそれを食べることを思ひ、その日の俳道にいそしんだ人であらう。明日を分らぬ暮しであつた爲め勢ひ金錢に拘はらず、その事は不自由ながら杉風その他の門人等がして呉れたのであらう。それすら芭蕉の氣もちに入つてゐても、芭蕉は黙つて受納してゐたに違ひない。貧故に謹しみ、貧故に物貨の欲をあらはさず、貧故にこそ一生食べられた幸福の眞髓



を舐めた人であつた。併し彼が日夜の窮乏は彼ならでは知る事の出来ぬものがあつたらう、人知れず己の貧乏に姿を亂すことは無かつたらうが、心、鬱屈したことは屢々であつたであらう、併し俳諧はその鬱屈を正したことは實際であつた。市に草稿を賣る文學修業時の貧窮も、屢々その作をつくる時に可成の慰めを得る様に、彼もその一途にあつた事が首肯れるやうである。彼の羈旅の費用は杉風や許六、丈草などから出てゐる事、また史録に現はれぬ篤志家の獻金による生活の事等を思へば、江戸へ出てから何一つ世間的仕事（水道工事のことは問題ではない。）をしなない芭蕉が、よし代は元祿の昔であつたにしても不思議なくらゐの太平の逸民であると言つてよい。併し金錢の上から芭蕉が世上俗流の批難を一つも受けてゐないところから見れば、その人からの中に世情人心の口を塞ぐやうな高潔と清純を併せ有つてゐたことが、今から考へても自ら首

肯かれるのであつた。常にどういふ意味からも人々を感嘆させるやうなところ、常にとうてい及ばない人格の何物かを有つてゐるところ、常にあまりに物事にこだはらぬところ、人のものをも自らの物をも區別しないやうな生活、それでゐながら俳道の事は一步もゆづらぬところ、心の問題は常に燈明のやうに胸に持つてゐたところ、凡夫にさへ何かの意味に於ても偉さを刺し徹してゐたところ、時として近づき易く又時として近づき難い畏敬を窺かに人の心に起させたところ、柔和と端嚴と交へてゐる物静かさ。さういふ數限りない一切のものを有ち併せてゐる人格であるらしかつた。一寸見には親しみ易く二度目には氣難しく、次第に親しむごとに一枚づゝ殆無實際に己の心の皮を剝いで見せるといふ人からでもあつたらうか？——路通を破門し乍ら又彼を再び愛し慈しんだ心は、徒らな温厚を賣物にした人でないことが解る。



萬子の錢別を辭した芭蕉であつても、金澤逗留の費用は金澤俳人が持ち寄つて負擔してゐる、それは當然の事であらうが、さういふ氣持も交つて斷つたのであらう。旅中多端の芭蕉が恬淡にその事を斷つてゐるのは、彼の氣質が、どういふ時にも弛まないでゐたことを證據立てゝゐる。どういふ時にも隙間のない批難のない言行動勢をしてゐたのは、自らを謹んでゐた以外、多くは彼の本質がさう常に彼を行動せしめたものである。氣質に靜寂を、行爲に清閑を、友愛に端嚴を、師道に眞實を、恩愛には優柔を兼ねてゐたところの、純日本人風の代表的な氣持をあれほどまでに完成した人は古來少數ない。利久の清閑には霸氣と凜才とがあつた。秀吉をさへピリツとさせる苦蟲を胸底に持つてゐた。併しその人がらに何故か風流人としての止み難い型があつた。西行の歌の拙いのはその心の貧しさ拙さに依るものとして見られぬが、何よりも西行を思慕し

乍ら西行を超えた芭蕉が適かに立勝れてゐることは、その西行を踏臺にしてゐることも解る。

何の木の花さは知らす句ひ哉 芭蕉

雲折々人を休むる月見かな 同

その他西行を踏んだものが多い。宗祇や杜甫に淑した彼が、何時の間にかずんずん先へ伸びたことは、芭蕉の中のもの立勝れてゐたからであらう。芭蕉は人の句、人の歌の心を盗むことに於て大膽不敵であり、そして盗まれたものよりもずつと上にゐるのは、彼が絶世の詩人であつた所以であらう。凡庸の徒は人の作を踏み且つ盗むことをすら知らない、――



## 芭蕉と詩に就いて

元祿時代にもなほ新體詩といふ今の詩の一形式が存在してゐたら、あるひは芭蕉は新體詩をも書いてゐたに違ひない。今の世に彼が一青年として存命生活してゐたら恐らく第一流の作家でなければ、古今を絶した大詩人の面影を持つたであらう。幸か不幸か彼は元祿の大家だつたから、特に彼を現世の文學者として數へる必要はないが、彼の新鮮無双の大器は現世の文學に存在してゐたら、どれだけ我々を驚かせる大作を書いてゐたかも知れないのである。

彼の英才と今ある文明との存在は、恐らく曾て我々をして舌を卷かせた元祿時代の彼をして、一層新鮮無適な表出を以て迫るであらう。何人も彼の前に跪

座せしむべき一大壓迫としての顯れを見るであらう。

彼をして飛行機や自動車の今の世を墓下から垣間見させたら、彼は温籍の微笑を浮べていふであらう。「わしもそれは考へたこともあるが、人々は笑ふであらうと思ふていはなんだ。」

そして我々は「この秋や何で年とる雲に鳥」の幽遠を思ふ時は、飛行機などの發展は實に遅れてゐるとしか思へない。

何人も芭蕉を有名なる作家とせず、既成的な大作家としないで、もう一度朝暮の我々の讀物として愛誦したら、彼を一層愛することができよう。あらゆる芭蕉的文献の歎賞の前に一個人づゝが、ひそかにこの作家を個的に楽しみながら讀むことは、決して無益なことではない。――

假りに彼から枯淡を抜き、風流を去り、さびやしをりを掃き出し、吾々は新



文學としての彼の存在や、彼の意氣や、新鮮や、雲霧を睨むところをもう一度見直して見るのも、決して我々の親密を過つものではない、——そして我々の始めて氣付くことは、實に彼が新文學の要素を驚くほど豊富に我々に感じさせることにおいて、我々は彼を見直したことの徒事でなかつたことに心づくであらう。

芭蕉は誠の發句を開祖した。それよりも以前、彼は人間の心にあるもので、あれほど永い間隠れてゐた靜さを、あれほど永い間かゝつて現し盡した。

自分は神を信じることができないが、芭蕉を信じることができる。かう言つても自分は別にこの「信じ」方について、誇大だとは思はない、一つは神がどれほど自分に働きかけないけれど、芭蕉の働きかける力が大きいことを證據立てるに外ならぬ。神はいふであらう。

「あの男にはおれより芭蕉が偉く見えるなら勝手にさう思はしてあげ。今に目が覺めるだらう。」

自分には今に目が覺める時があらうとは思へない。一日づゝ彼が好きになる外、一日づゝ彼に深まる一方であらう。



蕉門の人々



凡 兆 論

一

凡兆は常に大凡兆であらねばならぬ。蕉門中の英才であり、同時に元祿の作者としては凡兆を超えるものは稀である。遂に丈草と雖もこの作者としての凡兆の次に位すべきものではなからうか。才幹の鮮鋭、結構の新整、焦點の狂ひなき非凡の逸品は、蕉門の誰人も一席を譲るべきであらう。猿蓑集の選をあげかつた彼が自分の作品を多く出句してゐる手強い自信には、芭蕉も言葉を挿むことを控へてゐるくらゐ、彼の句柄は秀れ纏つてゐる。單に秀れてゐるばかり



ではない、蕉門のあとさきを通じて彼のやうな作者は稀にも皆無と言つてよい。

凡兆の見たものにくるひの無いことは、その性根の坐り方の確實さを感じさせる。大作者といふものは常に粒の揃つた微塵もゆるがない或物を持つてゐるものである。我が凡兆は總ての大作者の面影であるところの、一句として粗末な姿を持つてゐるものは無く、それぞれの鋭い風情の中に數少ない此の作者の世界を引提げて立つてゐる。猿蓑集以前の作はともかく集中のものは悉く逸品で、稍々ともすれば作者としては芭蕉の右肩に聳える一高峯であつた。去來支考又は嵐雪の逸品を以てしても、凡兆を抜くことはできないと言つてよい。極言して我が日本の俳道は元祿に盡きてゐると言へるなら、芭蕉が最高の山嶽であるとしたら、凡兆は鋭峻なほそみのある高峯をもつて、絶えざる千古の風雪

を戴いてゐたらうと思へるのである。彼は何よりも新しい生々した力を持つてゐる。芭蕉の新しさは同時に百年の古さを以つてゐることに深い枯寂があつたが、彼の新しさは唯その新しさばかりの生一本で通つてゐるから驚くのだ。しかも萎えることのない新しい鋭さで、今、枝から下した花實のやうに水々しい。斯様な新しさは蕉門のみばかりではなく、遠く天明へまでも其の翼を擴げて飛ばたいゐる。何人もこの翼の下にあることは決して偶然ではない、しかも作句の數の少數い彼が、斯くまでに凡兆が大凡兆の名を傳へるまでに至つたのは、その句作の腹が巍然として定つてゐたからであつた。

も一つ見究められぬ膽の太さが句の中を打ち貫いてゐることに氣づく、しかもそれらは彼の作句を重厚無類ならしめた所以であつた。蕉門中彼の如く重さのある句を齎したものはゐない。芭蕉と雖も彼に見るやうな重さを稀に缺いて



ゐた。これを風韻孤寂の文章法師に較べたら、彼の寂しく幽かなるにくらべ、凡兆の力ある生々しさに今さらながら氣が惹かれる。文章は高く雲をいたゞいて聳えて迥かではあるが、凡兆の峯の秀は晴れて残雪を棚引かすところの鋭さを以つてゐる。一つは高遠で彼は峻嶮であるが如く見える。

二

- せり上げて蒼をこぼす葵かな 凡兆
- 木のまたのあでやかなりし柳かな 同
- 捨舟のうちそとこほる入江かな 同
- 古寺の簀の子も青し冬がまへ 同

これらの中にある凡兆の新しさは、打透つてゐて濁らぬ新しさが走つてゐる。

「せり上げて」の旺盛可憐、「木のまたの」の幽清細緻、ともに彼が眼光の凡ならざる底を示してゐる。「捨舟の」の畫趣、「古寺の」の鋭い簀の子を見た彼は、漸くその句の丈に師翁の佛を漂はしてゐる。「せり上げて」の世界は天明の蕪村のねらひどころであつたに違ひない。しかも「木のまたの」のに至つては近代アララギ派歌人も舌を巻くところの新鮮である。彼の心にある熊手の打ちかけ方は此等の句の上にさへ確乎と引かけられ、最う動かないところを暗示してゐる。

- 灰捨て白梅うるむ垣根かな 凡兆
- 骨柴のかられながらも木の芽かな 同
- 明ぼのやすみれかたぶく土龍 同
- 山陰やいつから長き露の臺 同



すゝしきや朝草門に荷ひ込 同  
 灰汁桶の雫やみけりきりくす 同  
 しくるゝや黒木積む屋の窓明り 同

柴田笥浦氏の凡兆句集に據ると凡兆は元祿二年以前は加生といふ俳號を用ゐたことになつてゐる。予の生國加賀金澤の生れであるが、早くから京都に出て醫業を開いてゐる。何かの取巻きにされて下獄したが、「骨柴の刈られながらも木の芽かな」の句はその折の作とされてゐるが、例に依つて俳句傳説の一つであらう。出獄後は諸書に見えてゐるやうに行衛不明とされてゐて、芭蕉臨終にさへもその名が見えなかつた。正徳四年に變死したやうに云はれてゐるが、或は眞實かも知れぬ。ともあれ一代の大凡兆の句生涯は猿蓑を中心として風の過ぎ行くやうに消え終つてゐるのも、何か此の鬼才ある俳魂の最後として相應し

い。端正な蕉門の子弟の中で彼の如き最後を爲したものは、尾張の杜國と二人だけである。彼の作品に見える逸才は彼の社會的生涯を誤つたものとして考へて見ても、首肯できる或物を持つてゐる。或は彼の逸才を以つてしても、發句など大したものではないからゐの、異常な才能を持つた人ではなかつたらうか？  
 — 醫を業としてゐたので或は存外な罪科に問はれたのかも知れない。  
 彼には透明な静さが何時も一抹の雲霧を曳いてゐるが、その新鮮さの澄んだ美しさの中に、他のものが入ることの出来ない彼の住む世界が出てゐる。「灰捨て白梅うるむ垣根かな」の素直な、玲瓏玉のごとき句境は、丈草の如きさびはないが、さび過ぎて新しくなつた一面もないでもない清さである。「山陰や」や「明ぼのや」の情景に彼はいつも心を凝らしてゐる。實に眼前の景に心を奪はれる人ではなく、永い間それを見凝めてゐる丹念鏤刻の人であることも分る。



彼には不用意なことや、一寸した情熱に動く事や、輕はずみなどを押し凝らしてゐるところがあるのは、遠く他の門葉の迥かに及ばないところであらう。「すゞしさや朝草門に荷ひ込」などは、さながらの青々しい籠の内のものが眼に見えるやうで、彼の心の生きの善さが思ひ遣られるやうである。彼の最もよき特徴を持つた世界であらう。しかも奈何なる素材でも彼の前では、その時間的なものでも手強く詠まれてゐる。「灰汁桶の」の雫のごときは、また彼の心に程よく調和された「時間」の表現である。

三

芭蕉はどういふ風に見てゐたかは、猿蓑集の選をあづけた一事でも判明するが、それよりも彼の鬼才は芭蕉の心を驚かしてゐたことは實際である。

下獄の後、芭蕉も世の常人のごとく凡兆のことは口にしないやうであるが、或ひは芭蕉歿後の下獄ではなからうか。さうでない<sup>か</sup>と彼れ程、愛の深つた芭蕉が彼のことを念はない筈がない、しかも蕉門の大立物である彼の行衛不明が芭蕉在世の時であつたら、芭蕉は必らず彼のことを朝暮に口の端に上らせ惜んだであらうに。——或は芭蕉病褥に就く前に下獄してゐたのかも知れない。それ故「花屋日記」にも凡兆のことが書いてないことで解る。しかも彼は門葉諸子とも晩年（變死前）には往復しないであつたものらしく、淋しい鬼才あるものゝみが迫る、孤寂の境にゐたものらしい。その妻の羽紅も女流として聲名があり、仄かにも可憐な春秋の作者であつた。妻に俳諧を許し其の才能を認めたる凡兆は一つの情の深い、やさしい男であつたらう。

春雨のあがるや軒になく雀

羽紅



お隣の愛宕みやげや鬼柑子 同  
「春雨の」の女性らしい弱い匂がらに、羽紅らしいよいところが軒雀の聲に色を出してゐる。夫亡き後は羽紅尼と言つて剃髪したらしく、柴田氏の凡兆句集後記によると、元祿十五年上木の太田白雪の「三河小町」にな、には羽紅として出句してゐると書いてゐる。その頃なほ俳道に親しんでゐたものらしいことが解る。

片手わざに負ふ子あぶなき覆盆子いちじこ 同 羽紅

迷子の親の心やすき原 同

霜やけの手を吹てやる雪まるげ 同

「わか身よわく病がちなりければ髪けつらむも、むつかしと此春さまをかへて」と前書して「笄も櫛もむかしやちる椿」と詠んでゐるのを見ると病弱瘠身の女

であつたらしいが「片手わざに」「迷子の」の句を見ると子供があつたやうにも想ひ描かれる。分けて「霜やけの手を吹てやる雪まるげ」は母親の愛情の外的ものではなく、子供がなくては此句境の眞實が生れない譯である。彼女もまた加賀松任の千代尼のやうに子供のあつた女ではなからうか？——そして凡兆の生國が金澤であれば或は金澤の女であるかも知れない。予は此次の歸省には金澤出身の元祿俳人の事蹟を徹底的に調べたいと思ふてゐる。若し凡兆が金澤を發つて京都へ赴いた時に妻があつたとしたら疑ひもなく羽紅であらう。羽紅だとしたらその時代に俳諧に親しむ程度の文字が讀めるものとしたら、彼女は武士の娘であるに違ひない。

呼かへす鮎賣見えぬあられ哉 凡兆  
藪蔭の足輕町や残る雪 同



市中は物の匂ひや夏の月 同  
砂川や夕がほのある屋れの上 同

凡兆の故郷である即ち予が故郷の金澤の風色が、最もよく凡兆に沁みついて表現されてゐる。凡兆ばかりではなく作者と故郷の風物の關係は却々に深い根を持つてゐるものである。「呼かへす鮒賣見えぬあられ哉」は宛然に冬の日の金澤風景詩である。城北の潟からの鮒賣は冬になると賣りに出て來るが、急霰にまぎれて呼んでも聞えないで鮒賣が去つてしまふ情景がよく出てゐる。この地方の鮒賣りは大概磯濱の女らの冬の商ひである。予は此句に據つて今なほ潟から出てくる鮒賣女が、二百年前にも城下へ商ひに出てゐたことを知つたのである。郷土の作者といふものは或史實的考證に的確な例證を與へるものであることは、ひとり凡兆の場合ばかりではないが、自分にはこの句に依つて二百年前

に逆戻りして思ふことができる便宜を感じた。

「藪蔭の足輕町や残る雪」の藪も足輕町も今なほ町を形づくり、小路となつて残つてゐる。わが凡兆も郷間の風致の中にゐたかと思ふと、新しさは一倍する。

——氣のせいかな凡兆の作句は京都へ出たあとからも、なほ郷土を詠んだものが多いやうに思はれる。「市中は物の匂ひや夏の月」の幽かさ、何となく生活を沁みさせてゐる此の境地も、金澤であると云へば云へる光景である。「砂川や夕がほのある屋ねの上」と雖も、故郷らしい風趣が窺へるではないか。

凡兆があれほど新鮮な句作を爲し得たのは、何と言つても幼年時代を金澤のやうな自然風物に親しみ得る土地にゐた爲であらう。然も幼年時に見た草木風物はその人の生涯を通して、其人の中に何時までも新しく青々とそよいでゐるものである。凡兆が何者よりも新しく細かい觀察を以つて一代を爲したのは、



穩やかな山河の中に擁かれ育つた爲に外ならぬ。

### 北枝の家

芭蕉が元祿二年七月（おくの細道）金澤へ陰錫を駐めた前後は、加賀俳人の史録の中でも最も秀れた作者を出した時代である。殆、それ以後蒼蛇、梅室に至るまで餘り有名の人はいない。一つは蕉風が行き亘つてゐたためで全国的に言つても元祿は俳句の最も旺んな時代であつたからであらう。金澤を中心にして野澤凡兆、その妻の羽紅、立花北枝、その兄の牧童、柳陰軒句空、秋の坊、山中温泉の和泉屋桃妖、木薬屋の宮竹小春、生駒萬子、村井塵生等がゐた。しかし凡兆北枝は群鶴を抜いてゐたことは勿論である。生駒萬子の如きは蕉翁三

友中の一人であつたと傳へられてゐる。和泉屋桃妖は少年時代（おくの細道）に芭蕉を泊めて相識つてゐる。凡兆は勿論、北枝は性來酒癖を持つてゐたに拘はらず芭蕉に愛せられてゐた。北枝もそれを徳として金澤大火の節芭蕉から手紙を貰つてゐる。芭蕉も當時（貞享元年）大災に會ふて甲斐に暫らく後塵を避けてゐたため、なほ身に沁みて火難の憂ひを知つたのであらう。

「池魚の災承り我も甲斐の山里に引うつりさまゝの苦勞いたし候へば御難儀の程察し申候されども焼にけりの御秀作斯る時に望み大丈夫感心、去來丈草も御作驚き申ばかりに候名歌を命にかへたる古人も候へばかゝる名句に御替被成候へばさのみをしかるまじくと存候知音たれゝ此度の難にまぬかれずや連中たしかなること不承候間短紙も不遺美能御傳達可下候以上。

北枝の手紙の句は「焼にけりされども花は散すまじ」の作である。まだ「お



くの細道」へ三四年も間のあることであるが、もう北枝やその他の俳友とも親簡を遣り取りしてゐたものと見える。一面から云へば芭蕉は手づから凡兆北枝小春の徒を掘り出したと言つていいのである。殆、桃妖のごときは別けてその感が深いやうである。北枝は遠隔の地にあつたに拘はらず蕉門十指に數へられてゐたのも、餘程蕉翁の知遇を得たものであつたらう。山中温泉に芭蕉と一浴を試みたときも、北枝の飄逸ではあるが人慕はしい情はよく芭蕉を信じしめたに違ひない。

凡兆は中年後京洛に去つたが、北枝は殆その生涯を生國である加賀金澤で暮した。職は研師だつたが刀劔の研工であつたことは勿論である。今こそ少數いが、金澤は城下だけに研師の職が多かつた。北枝の隣は酒屋であつたために飲酒家の彼がともすると杯を手離さなかつたことが首肯される。凡兆、萬子、千

代尼、関更などにも金澤を中心にした自然人情を詠んでゐるが、北枝は懶怠で風體などは構なかつたところ、城下を彷徨して童子の笑ひを買つたところなど、他の俳人とは違つた逸話が多かつた。ことに金澤の風物に入つてそれを己れの志としたことは、懶北枝の場合、なぜか沁々とした素大な風流を感じさせるのである。

金澤は昔から武家ばかりの町家だつた故、自然俠客のやうな人物がゐない。佛教の早く行き亘つたところだけ敵打のやうな殺伐な口碑さへ一つ二つしか遺つてゐないやうである。町家の妻女までが何となく鹿爪らしい行儀を見習ふてゐる。さういふ町家を俳奇行者としての北枝の彷徨は、元より風采のよからう筈がない。町家の人人から後指を差されて一幅の笑物になつてゐたことも肯かれることである。



北枝は昔は武家町の、いまの彦三一番丁に住んでゐたらしい。その家は現に今も残存つてゐるが高臺で川を距てて夢香山を見晴らせる位置にある。いまは幾代かのあとの遺族が、古い俳書や、蘭更、芭蕉、北枝の幅を藏しながら暮してゐる。家の作りもいいが果して北枝の住んだ家かどうか分らない。研師の座敷としては建具の結構など立派すぎるくらゐである。或ひは其處の地内に研場があつたのかも知れない、さう見た方が此の家の通りから引き込んだ構へから考へて見て、甚だ自然のやうである。兄の牧童も句作はあつたが、北枝の方が句技適に秀れてゐたやうである。

鶏鳴いて秋の日よはき曇かな 牧童

小家つゞき垣根くの黄菊かな 同

寝るまでの名残なりけり秋の蛸 塵生

ふり初て日半くの時雨かな	句	空
栗いける砂の折敷にあられかな	同	
小夜時雨身は何ゆゑにあたままる	秋の坊	
思へども雑の歌かく扇かな	萬子	

「うぐひすや谷の景色を庭の面」この北枝の句の風致や、兄の牧童の「小家つゞき垣根くの黄菊かな」の情景も何となく古い地理を物語つてゐる。去來、丈草は勿論、田舎でくらしした淡々、浪花上人、あるひは蕪村、一茶の句作の中にはその田舎の風景風俗の激しい新鮮さが流れてゐるのも、やはり物佗しい田舎に住みなれて、それが氣もちを綴つて出たものであらう。いまさら事新しく書くまでもないが、作者と田舎の関係は殆、根本的な心もちであると言つてよい。一茶の「次の間の灯で膳につく夜さむかな」蕪村の「さりざりす自在をのぼる



夜さむかな」浪花上人の「間引菜の隣は菊の句哉」など一つとして田舎の景色ならぬものはない。その間にあつて一茶のごときは境遇や人情の上から最も深酷に骨身に沁みて感じた人であつたらう。

世の中は鶴鶴の尾のひまもなし 凡 兆

須磨にて

川水や汐つき戻すほとゝぎす 同

五月雨に家ふり捨てなめくじり 同

「五月雨に……」の如きは故郷の廢屋の感じが出てゐて餘蘊がない、世の中は、——の句は何となく心惹れる句で、今も昔も左うあつたであらう生活の忙しさ、慌しさが、一羽の鶴鶴の尾にあらはれてゐて興がある。

さむしろやぬかこ煮る夜のきりぎりす 北 枝

末枯や茶粕こぼるゝ草の垣 同

此の二面の風景と人情とは、二百年後とは思へぬ程の、いまも残る故郷の風色である。さむしろのの句の物寂しさ、秋閑けた壁の冷たいありさま、末枯の身にしみる侘しさ、それに茶粕のこぼれた情景には、幽かな人情の温かみが漂ふてゐて懐しい句である。鍋の中にことごとと豆類獨特の相觸れ合ふ音を立てて、ぬかごの煮えるのは思ふても心侘しい。大方、牧童と二人で煮たものであらうか、それとも牧童の妻女が里がへりにでも出て行つたあとで、煮炊の仕ごとしたものでもあらうか、一説に牧童といふ人は絶えず寝てばかりゐた人ださうである。朝寝、朝から午後まで一と寝み、ひる寝に宵寝といふ風だから自然北枝が煮炊することがあつたかも知れない。兄が左ういふふうであるから、弟の北枝も城下の名物俳人のやうに唄はれてゐたのも、強ち故無きに非ずである。



よく似た兄弟である。同じ故郷の風色をよんでゐる関更も、矢張り夜長の私に故郷を思はせるに充分な懇しさをもつてゐる。

魚釣りの刀さしけり萩の聲 関更

七月や小草がくれに灯のともれ 同

大津繪の鬼もよこれつ 椿明り 同

これらの景情は悉く加賀地方の風俗でないものはない。足輕の魚釣り、町端の夜の家々、榎火にほのめく大津繪の怪磊、わけて魚釣りの句が生きてゐる。

蝙蝠に手もともくらし油賣 北枝

此の句は廂の深い北國らしい町の様子と、日暮れの迫つた油賣りが、たらりと垂らす油が夕明りに一筋に光る有様までが眼に見えるやうである。私がまだ少年時代まで油賣が夕方に早いころに、鈴を鳴らし乍ら呼び歩きしたものであ

つたが、いまは油の需要も無くなり呼び歩きしないらしい、——私の記憶によると油賣といふものは夜を思はせ、淋しい心を唆るものである。わけても昔は丹塗の櫃のやうな入れものを擔ふた油賣りは、妙に氣淋しいものであつたに違ひない。蚊喰鳥がすぢかひに町をよぎるのも、夏の夕ぐれらしい光景である。

池の星またはらはらとしぐれかな 北枝

根雪かと思ればおそろし風の音 同

何の實ぞたまたま見出す雪の門 同

根雪の句のごときは北國に住んだものゝ何人も忘れることのできない風の音を思ひ起させるに充分である。山も家も鳴る底深い風がどこからともなく起つて来て、むしろ静に皓々と照るやうに鳴るのを聴くと、或る沈んだ冬に對ふてゐる心が慍えて来る。冷たく搏してくる心もちである。身うごきのできない



やうな氣もちだ。私もさういふ冬を二十幾年かを故郷で送つたものである。根雪といふのは、積つた雪の上に雪が新しく降りつもつたそれを言ふので、下積みほど凍えて石のやうに凝固してゐるのである。年を越えるのを云ふてゐる。「何の實ぞたまたま見出す雪の門」はいまも町の裏通りに赤い實のほのめく有様を云ふのである。梅擬、南天、野茨、からす瓜などあるが、この句では一寸見つけない稀らしい實のことで、何の蔓か木かよく分らない實である。實際國の方には冬も赤い實のついてゐる木や蔓が多く、これはどこでも北國によくある遅い木の實である。菊いたゞきなどといふ小鳥や、黒つぐみ、目白が人家の庭さきに下りて來るのも斯ういふ赤い實に呼ばれてくるのである。そして雪の上はその實を啄んで殻を零してゐる。北枝のころもさうであつたかと、昔懐しい郷色の幾片かを手の上に眺めるやうな氣もちである。

芭蕉は北枝によく手紙を書いて、附合の注意などに、「附合十七體別紙に記進候初心には見せ被申まじく候術の叶ぬうちに此味を付んといたし却つて一句も調ず附意もしれぬ事に成るものに候又むづかしきものなり」と言つてゐる。又次ぎの便りには「其許同行においては十人にもまさり力おぼえ候事に候」と言ひ、萬子、牧童、秋の坊、句空、小春などの英雄へも能々御遠したのみ存候」と、旅に北枝を誘ひ乍ら北枝への信賴をあらはしてゐる。

此の一通の手紙を見ても北枝を始め加賀の俳人が芭蕉の心の中に、重い存在を置いてゐたことが肯かれる。兄牧童へも元祿三年七月に手紙を書いてゐる。隠士秋の坊閑居御訪珍しく得芳意大慶仕候（略）大火の跡いまだ萬々御心も静なるまじく候（略）拙者儀山廡秋至候ては雲雪に痛候而病氣に障り候故近日出庵いたし名月過には何方へなりとも風にまかせ可申と存候。



近日出庵とは石山の奥の幻住庵で此處には四月から九月まで芭蕉がゐたもので「世の中から離れたい」望みを心に食ひ入らした時代である。芭蕉は四十七歳になつてゐたが牧童も同年くらゐであつたらう、北枝は四十歳を出たか出ないところであらう。五十一歳で屬曠についた芭翁の晩年に近く「雲雪に痛候而病氣に障り……」云々の手簡は、その心のいたみまであらはしてゐる。

北枝と秋の坊とは絶えず句論争ひをしてゐたが、芭蕉が元祿二年に來たとき二人は仲たがひを中止したさうである。秋の坊が幻住庵に一二泊をした時に風流の隠者だと言ひ、その道のことを話して、

やがて死ぬ氣しきは見えす蟬の聲  
芭蕉  
の一句を示してゐる。

柳陰軒句空の庵で泊つた芭蕉は、句空の蕉翁を思ふこと去來に劣らざるを見

てむつまじく物語つたさうである。

ちる柳あるじも我も鐘を聞  
芭蕉  
藤咲て庵のやうになかりけり  
句空

芭蕉を中心にした加賀俳人の擡頭は、その以前からであつたらうが、「奥のほそ道」が鬱然たる力を爲してゐることは争へない、それ以後特に記すに足るべき俳人を數へることのできぬのを見ても解るやうである。

池の星またはらはらしぐれかな  
北枝

この句は恰もしぐれの季節である郷土の景色を餘さず寫してゐる。その閑かささ鋭い冬が淵のやうな池水にうつる星の明りに見出されてゐる。恐らく北枝の句の中でも秀れてゐる句である。私は郷里にゐるときに能くかういふ光景に接したが、頭に残るすごみを持つてゐる句である。手法に象徴的な深みもある、



名物俳人であつた北枝とは云へ、心の底に沈んだ考へを有つて絶えず四季の移り變りに心を向けてゐたことが解る。凡兆のねらふたところも矢張り北枝と同じ北國人のねらひであつたのだ。加賀俳人の双壁は何と言つてもこの二人であつたらう。

追記

この稿を終えてから金澤の俳友桂井未翁氏から「加賀の松」といふ故俳書を得たことを知らして來たが、之れは貞門の山茶花友琴といふ人の追悼句集で、友琴は芭蕉來錫の時に貞門を固守して會はなかつたらしい、その中に、

かまきりの虚空をにらむ殘暑かな 北枝

といふ句がある。友琴と北枝と交遊があつたかどうか分らないが、北枝の句として珍らしい發見であらう、恰度折よく北枝のことを書いてゐた矢さきであ

るから附け加へて置く。

丈草と去來

一

凡兆の手固い健實な作句は蕉門の逸品であるが、何と言つても蕉門の双壁は丈草と去來の二人であらう。僧丈草の風貌は蕉門の中でも迥かに秀でゐる。之加も蕉門を代表する練え、門葉中の老實な厚みのある唯一人であると言つてよい。芭蕉は丈草を評して「此僧此道にすゝみ學ばゞ人の上にたゝんこと月をこゆべからず。」と言つてゐるのも、よく蒼古の丈草を知るものゝ言葉である。



丈草は單に蕉風を受け繼いでゐるばかりではない、芭蕉の風格の中から割れて出たほど、諸々の芭蕉のさびしをりを受けてゐる。芭蕉も心ひそかに丈草には慇懃な或る尊敬さへも有つてゐたやうである。臨終の芭蕉が丈草出來されたりと言つて「うづくまる藥の下の夜寒かな」の句を賞めてゐるが、事實はどうあらうと句技の秀でゐる彼の、常に芭蕉から受けてゐた挨拶でもあつた。

丈草の沈潜な枯淡は去來にはない、芭蕉を信じる事神の如くであつた去來は、その歴代の父祖に武士の血統を引いてゐる彼だけに、忠愛の道に傍見もふらないところは、一味の情熱家であるとは云へ蕉門屈指の士である。いづれが芭蕉の右手か左手か知らない、しかし此二人は人間としても、また作者としても芭蕉の心に頼まれてゐた人物であり、彼らもまた師翁の心に熱い信頼を得てゐるものであつた。

寡黙な丈草の面影には尾張犬山時代の武士の風貌を有つてゐて、一見、その心の確さが表情づけられてゐた。「涼風にきゆるを雲のやどりかな」の一句を残して飄然と弟に家を譲り故郷犬山を去つて佛乘に歸した禪客としての丈草の前生涯に、どういふ蹉跌があつたかは自分は知らないが、そのさびと言ひ、たちの善さと言ひ、作品の上では去來の敵ではない、老練と云ふよりも心の坐り方が何時も定つてゐる。

雪曇身の上をなく鳥かな 丈草

此の句境の一端にも、蕉風を後代に譲り渡すだけの、後繼者の資質と老實を以つてゐる。或意味で丈草去來ほど蕉風を濁らさずゐたものは少數ない。凡兆北枝も左うであつたが、彼等はひたすらに師翁の心を心として生活してゐたからである。芭蕉歿後は一石一字の法華經を淨寫して己が心の保養としてゐた



ことも、此僧の場合は單なる逸話ではない、湖南粟津龍ヶ岡に見すばらしい茅庵の垣を結んで、自ら佛幻庵と云ひ、師翁を念ふの日の多かつた彼は、何處までも僧丈草としての佛を有つてゐた。その心は蕉門の何者よりも芭蕉に近く、また何者よりも温雅親切であつた。芭蕉の信じ方の強いだけ彼は芭蕉自らの血統を流し込んだと言つてよい程である。芭蕉は安心してその蕉門の砦を丈草法師に委せたと言つてよからう。

片屋根の梅ひらきけり烟出し 丈草

芭蕉翁の墳にまふで、我病身をおもふ

かげらふや塚より外に住ばかり 同

時鳥啼や湖水のさゝ濁り 同

稻妻のわれて落るや山のうへ 同

行秋や梢にかゝる 鉤脣 同

芭蕉翁の七日々々もうつり行衰さ無名庵に偶して

心地さへすぐれず去來が許へ申送る。

朝霜や茶湯の後のくすり鍋 同

水底の岩に落つく木の葉かな 同

二

丈草の道は芭蕉の際立つた新鮮をも求めなければ、試みをこゝろむ危さも経験しない、ひと色の静寂さで徹つてゐる。野心や危氣や衒氣も見ることができないかはり、和やかな落着きと、常に落莫たる風情を述べてゐる。「片屋根の梅ひらきけり烟出し」の情景には穩かさに徹してゐる客觀の句がらがある。かれに客觀の句の多いのは彼の心の住む世界の静さが類の無いためであらう。



「かげらふや塚より外に住むばかり」の人生観には諦め切つた一面の人生が物おごそかに無表情なまでに現はれてゐる。此の無表情の表情の數奇に至つては彼が幽玄の限りをつくしたと言つた方が適當である。芭蕉を思ふの情、師翁への答へられない淋しい會釋がつましく出てゐて、何とも云へず幽邃ではないか。

丈草の嘸み込む自然なり自然裡の大景であるところのものは、彼の吐き出しとなると締つた句境になり、どういふ大景と雖も把握されて壓しちぢめられて纏つてゐる。「時鳥啼くや湖水のさゝ濁り」でも「稻妻のわれて落つるや山のうへ」など、美事な嘸み込み方である。しかも「さゝ濁り」の利き方に至つては、遂に蕉門の一冠の長たるものを嚴かに持つてゐる。寫實を重んじた芭蕉の心もやはり此の一點にあつたことは言ふまでもない。其角や嵐雪が作句と子弟

の養成に江戸で蕉風後期の旗上げをしてゐる間に、丈草は默然として佛門にその日を暮してゐたのである。彼には蕉風の爲に天下の人氣を得る野心などあらう筈がなく、また求めて旗上げを芭蕉のためにする必要もなかつたのである。

芭蕉歿後の天下は亂れてゐたことは當然である。支考の空論、其角の豪奢等は漸く一城の主の死を追々に心あるものに嘆かせてゐた。許六が去來に宛て、師翁死後の俳壇を以つて芭蕉道を瀆するものとして憤慨久しくしたのも無理もないことであつた。唯一人、丈草の黙々として師翁の心を汲んでゐる姿は、去來の清境溫籍の性質と相俟つて最も芭蕉道をあやまらなかつたものであらう。生前たのみにしてゐた芭蕉もその清い心根には、地下にあつて微笑みを漏らしたことであつたらう。



「水底の岩に落つく木の葉かな」の沈潜の句境は、僧丈草の全生涯のしをりであり、閑かな心意氣であつたに違ひない。彼の心は常も一葉の落ちつく水底のやうに静寂で、何物にも觸れないで澄み透つてゐた。「まづ和歌の徳たる事、誰か仰がざらん、上つ代より傳へ來りて人の心を種とする言葉、その誠よりせめらるれば、鬼もあら男も項をたるゝ正直なり。」と「詩歌俳諧辯」に言つてゐる。何かを道破してゐる氣概を持つてゐる。「寝ころび草」には「すでにかく生れ來て、ものうき世の中に、いかで此身の心まかせならんや。」と言ひ、世に處する己れの諦念を消息してゐる。かれの諦念は、元々その佛道からと、そのさびしい心根からと、も一つ俳道の中で鍛へた幽寂からとの三調子を持つて固まり渾一されてゐたのである。

ほかほかと朝日さし込む炬燵かな

丈草

彼は病弱であつたゝめに飽迄俳諧道の戦ひをしなかつたのではない、彼は左ういふ派手なことが嫌ひだつた。

「當冬は持病氣指出候事もなく、もはや此身の程も急にやり可申とも存ぜざるほどの事よと、居住の事もますます落付、之迄の庵地買切りて一たん餘りの所にて候、先は所の住人となり申候、此身は一定不住の覺悟ながら、病身さうもならず……」と、内藤常右衛門あてに手簡を残してゐる。己の住居の中に己を守る彼は、孤獨に住むために世間との交渉をも經てゐる苦勞をしてゐる。「一定不住」の覺悟はしてゐても、元祿の昔にもさうは行かなかつたのである。ここに生活の纜が結ばれてゐるではないか。病身さうもならざる彼が心の用意おさおさ怠り無かつたことを思へば、丈草もまた一人となる前に人生の何頁かを諳んじてゐた様である。また諳んじてゐなければならなかつたのである。



## 三

應々といへど敲くや雪の門 去 來

丈草は評して、この句不易にして流行の正中を得たりと言つてゐる。自分はこの流行の調の中にある句を好んでゐない。丈草の評は當時正確を得たものであるかも知れぬが、正鶴の批評ではない。丈草凡兆北枝嵐雪其角と數へ來ても、その孰れの作者にも去來は特に際立つて秀でゐないやうである。彼の作句の光榮が、何故あれほど貧弱な萎びたものであつたか、それにも拘はらず丈草と並び稱されてゐたのであつたか、その大名は實力と添はなかつたことは何故であつたか、自分はそれらに永い間疑ひを持つてゐる。彼は名門の出ではあり風貌堂々としてゐたこと、温雅端正であつたことなどが、作句の外に或人格を持

つてゐたのではないか？ 温厚な人格はそれ自身で魅力を放つてゐるものだからだ。向井去來の重きを爲した所以は、その作句ではなからう。その一瞥人に與へる重厚の面影、武士だつた彼の巖丈な資質の中にあるもので、人々を尊敬させずに置かぬ或物を持つてゐたためではなからうか。許六も評してその人格端正を賞してゐる。芭蕉は彼を尠らず依怙最負したに違ひない。

芭蕉は丈草を以てする時は尊敬を加味した友情であつた。併し乍ら去來には度外れに愛してゐたやうである。北枝の場合よりも最つと敬愛してゐた。何よりも芭蕉は彼を信じ彼は師翁を敬ふてゐた事、それらの二つの感情は何時も人間的に結ばれてゐた事などが、芭蕉をしてより深い愛情を呼び起した所以のものであらう。それに彼は何よりも忠實そのものであつた。芭蕉は作句から子弟の間に入つて行くのが例であつたが、彼の場合は作句よりも直ぐさま友情恩愛の



道を辿つたらしく思はれるのである。

秋はまつ眼に立つ菊の苔かな 去 來

鶯の羽もかいつくろいぬ初しぐれ 同

こがらしの地にも落さぬしぐれかな 同

「嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり、五とせ六とせ  
經ぬれど、このみも持來らず……」と書き「みづから落柿舎の去來と書きはじ  
めたり。」と記してある。落柿舎は茶室を持つて來て建てたもので相當風雅なも  
のであつたらしかつた。芭蕉は嵯峨日記に記して、その庵舎のありさまをつた  
へてゐる。

「予は猶しばらくとゞむべきよしにて、障子つゞくり、葎引かなぐり舎中一間  
なる所伏處とさだむ……」と記し、別れに際して「明日は落柿舎を出んと名

残をしかりければ、奥口の間々々を見めぐりして……」と名残を惜んでゐる。

五月雨や色紙へきたる壁の跡 芭 蕉

去來はその落柿舎に譬言して、「一、我家の俳諧に遊ぶべし、世の理屈をいふ  
べからず。二、朝夕かたく精進を思ふべく、魚鳥を忌にはあらず。三、速かに  
灰吹きをなすべし。煙草を嫌ふにはあらず。四、隣の据膳を待つべし。火の用  
心にはあらず。」と書いてゐるところを見ると、芭蕉の何物かを傳へてゐるとこ  
ろがある。これは芭蕉の或種類の氣もちをそつくり模倣たと言つてもよい程で  
ある。併し乍ら彼の端正さは此壁上の數語に失笑させるやうなところが無かつ  
た。

彼と丈草とはその氣風を相通じるものを持つてゐたため、風雅の道ばかりで



はなく人間同士としても深い友情があつた。

懷二僧丈草一

寒き夜や思ひつゞける山の上 去 來

作句に秀逸の少ない彼の中でも、友情を思ふほとほと風情が現はれてゐるよい句である。晩年丈草の死に行き逢ふた彼は、その同じい年の秋にあえなく病歿してゐる。よほど丈草の死が心と體とに應へたものらしい。仲の善いもの片方が亡くなると、あとに残るものも月日を急いで亡くなる場合が多いものである。

丈草を哭す。凡十年の笑は三年の恨に化し、その恨は百年の悲を生ず、惜しみても猶

名残おしく、此一句を手向て、來しかた行すを語り侍るのみ。

なきかたや春や三とせの生別 去 來

と、哭き悲しんでゐる。去來を識るものは芭蕉を除いては、丈草一人と言つてよいくらゐであつた。丈草もまた去來を信じ翁亡き後の唯一の友垣であつた。しかも丈草も相當生活に事缺くこと尠く、去來もまた相應の餘裕があつた。これらの世間並の生活の禮儀が行はれてゐることが、一層彼らの友情を深く徳のあるものに固めたのである。去來を思へば丈草を思ひ、丈草を呼ぶに及んで去來を念ふのも理りであつた。しかも丈草が何事にあれ去來の兄分であつたこと去來自らも然う考へてゐたことも實際であつた。

丈草は芭蕉を偲ぶにさへ沈着であつたが、去來は萬腔の情熱を動かしてゐたと言つてよい。それは何よりも彼が論客であつた證據である。許六との俳諧問答に「師教月々に疎く、我意日々に生ず、たゞ秀逸のいでざるのみにあらず、かへつてその血脈をうしなふものあらん。しかれども今の世にあたつても、秀